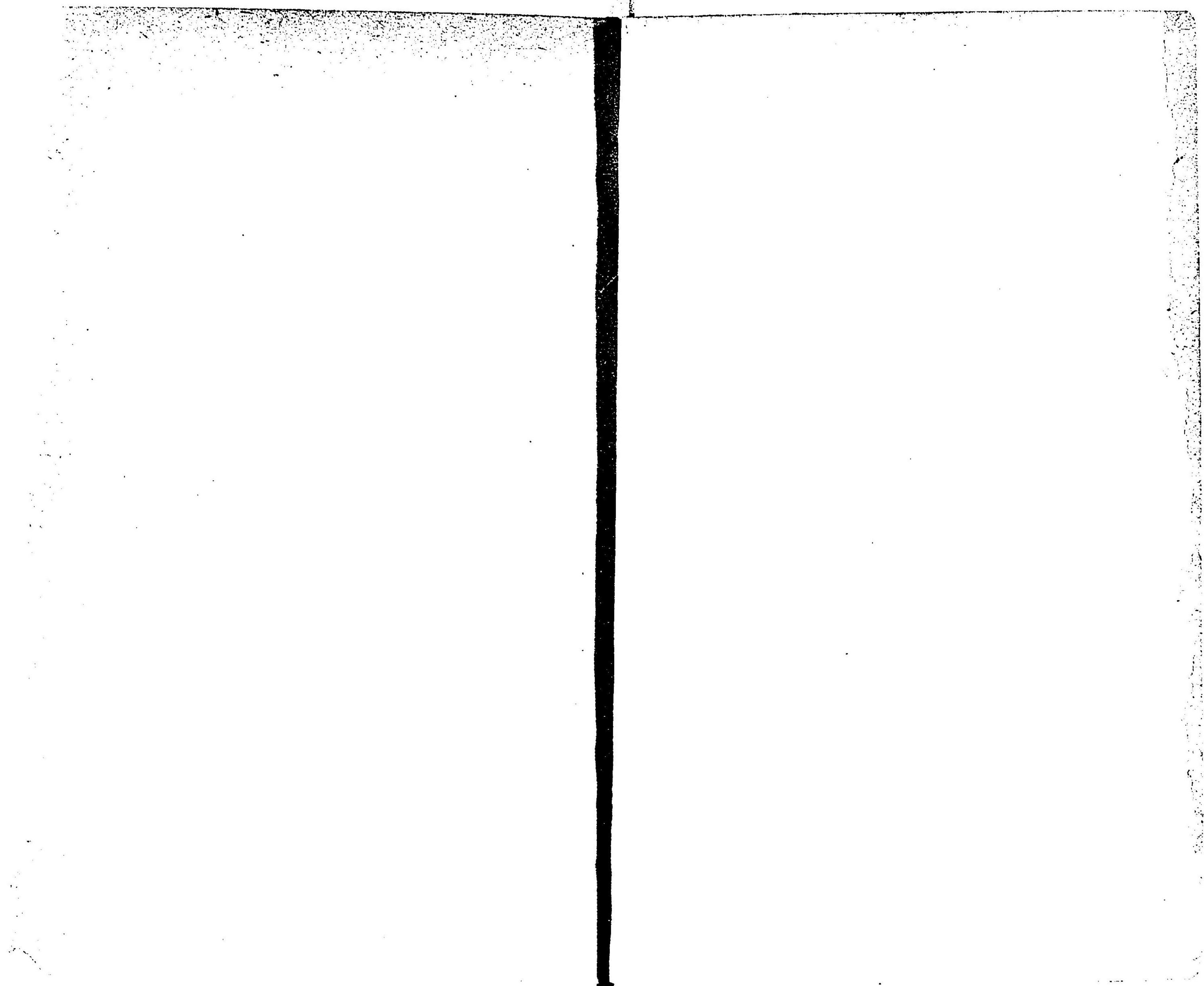


3  
1

他力宗教論







曉鳥敏評序  
楠龍造著

# 他力宗教論

東京文明堂發兌

明治  
37 4 22  
内交



### 他力宗教論序

道兄楠龍造君の著「他力宗教論」を最初に讀んだのは僕である。「他力宗教論」が先登第一に人に靈感を與へたのは僕へである。従ひて楠君をして本書を世に公にするやうに切に勧めたのは僕であつた。僕は本書が世に出づる事を無上の幸福と感ずるのである。豈一言なくして止まらうや。

南天竺の龍樹菩薩が佛教を難行道易行道の二道に判釋したのを受け繼ぎて、梁の曇鸞大師は難行道は自力門、易行道は他力門と云ふやうに、宗教上の修養の力の本源に就いて佛教を二つに分つた。而して古來俱舍宗、法相宗、華嚴宗、天台宗、眞言宗、禪宗、日蓮宗などを自力宗とし浄土宗、眞宗などを他力宗と稱して來た。就中眞宗の方では今の浄土宗は鎮西の聖光房の末流だから他力門中の自力宗だ、自分の宗こそ他力門中の他力宗である、純他力宗である



と云ひ來つたのである。

僕思ふに、一般に佛教と云ふ中には純粹の宗教に屬する部と倫理に屬する部とがある。自分の品行を善くし、精神を修養すると云ふことを目的として居るのは佛教中の倫理の方面である。之に對して自己の安心立命を目的として居るのは佛教中の宗教の方面である。而して佛教の佛教たる價值のある所は、この倫理の方面にめるのではなくして、宗教の方面にあるのである。僕が佛教に離るべからざるは、この倫理の方面ではなくて、宗教の方面なのである。僕が『他力宗教論』を推す所以の者は、この書が善く佛教が宗教としての領分を明了に説いてあるからに外ならない。

安心立命は宗教の目的である。故に宗教が宗教としての價值は其哲學でもなく、其倫理でもなくて、夫が安心立命の捷徑であるや否やと云ふ點にあると思ふ。そこで僕自身が世の風波に苦められ、

自己の罪に悩まされて、止むなく安心立命の地を得んと望みし所、之を得るには自分の智識や學術ではためである、自分の徳行も頼みとはならないのである。是に於て僕は自力にては到底安全の地は得られるものでないと云ふ事に氣が付いた。こう氣が付いて見ると自力の宗教などは世に存在すべきものでないと悟つた。宗教と云ふたら悉く他力でなければならぬとは、僕今日の確信である。僕が『他力宗教論』に多とする所は此點にあるのである。

僕の經驗によれば安心立命はたゞ、佛陀大慈の他力の救済を信ずるより外はない。即ち他力救済の門は信の鑰で開かるべきである。故に僕は宗教の生命は信にあると思ふ。又人が世に處するの根本の力はこの信に基くものであると思ふ。『他力宗教論』は此點を明にしてある。僕豈之を喜ばざるを得んやである。

他力の救済を信ずると云ふと、救済は他力なればこちらでは心



配はせぬが、其救済を信ずるには、いかゞして可なるべきやとは、宗教に入りかけの人の尋ぬる所である。然し之は大なる間違である。救済も他力也、信仰も他力也たゞ何事も他力也。世も他力也、人も他力也。一切他力ならざるはなし。日月の回ぐるも他力也、風雨の起るも他力也、花の咲くも他力也、鳥の歌ふも他力也。他力宗教とは世の一切が他力也と云ふ宗教と云ふてもよい。「他力宗教論」は此旨を明にしたのである。

一切が他力とすれば、我等は常に如來より守られ、到る所光明ならざるはないと云ふ鹽梅である。江月の照らすも如來の救済、松風の吹くも如來の救済にあらずと云ふ事がない。念々光明の中、歩々如來の地を踏む。云ふも光明、聞くも光明。光明中に生活するのは、僕等の幸福ではないか。「他力宗教論」は此點を表白してある。

かくて、僕はこの「他力宗教論」は宗教の極致を明白に巧妙に書き註した書籍であると思ふ。加之、楠君得意の筆を以て書かれた事として、時に詩を誦するやうなところもあつて、興味湧くが如くである。僕は此書を坐右に有することを喜ぶのである。

僕は楠君の心霊と僕の心霊とが、この「他力宗教論」によつて結ばれたることを、我が慈父如來に感謝いたします。

明治三十七年四月四日春雨あたくさき日

本郷曙町浩々洞紫水仙の匂ふ室にて

曉 鳥 敏 序す



### 卷首に書す

戒律修善の自力宗教の究極する所大慈悲攝取の他力宗教となる。猶太正義の神は一變して基督の愛の福音となる。師親戀歌ひけらく、煩惱具足と信知して、本願力に乗ずれば、すなはち穢身すてはて、法性常樂證せしむ」と、セント、ペルナード言ひらく、我は我自身を知るの深さに随ひ我は神を知るの深さに至ると、嗚呼それ解脱の根源救済の精髓は、自己の何たるを自覺し大慈悲の靈光に融合する、絶待他力の信仰にあらずしてはた何ぞや。

此書上編は系を追ふて他力宗教の教義を論述し、下編は



人物等に顯はれたる他力信仰の活力を顯彰せるものなり、  
文辭甚だ拙しと雖、敢て此書を世に公にするもの、これ著者  
の現代に對する義務なるを信するを以てなり。

明治甲辰新春北星僑

鳴浦誌す

# 他力宗教論

## 上編目次

第一章	他力信仰は宗教の極致なり……………	一頁
第二章	一切の門戸は他力信仰に達す……………	二〇
第三章	常識と他力信仰……………	一九
第四章	倫理と他力信仰……………	三〇
第五章	智識と他力信仰……………	三二
第六章	苦樂と他力信仰……………	四六
第七章	他力の啓示到る所にあり……………	五三
第八章	他力信仰の經過……………	六二
第九章	他力の本願……………	六六
第十章	他力の三信……………	七五



第十一章 他方の名號……………二八三

第十二章 他力の行信……………二九一

第十三章 他力教の佛陀佛國……………一〇一

第十四章 他力教の現世生活……………一二五

第十五章 他力教の發展……………一三六

第十六章 他力教の地位及使命……………一三三

下編目次

第一章 鎌倉時代及親鸞聖人……………一四一

第二章 法然親鸞二師の比較……………一五四

第三章 親鸞聖人と使徒保羅……………一六〇

第四章 阿闍世王論……………一八九

第五章 韋提希夫人……………二〇六

第六章 信仰行程の三譬喩……………二二六

第七章 日本文學上に現れたる他力教思想……………二三五

第八章 薄伽梵歌の他力宗教……………二六六



上  
編



親鸞におきては、たゞ念佛して彌陀にたす  
けられまいらすべしと、よき人の仰をかう  
りて、信する外に別の子細なきなり。念佛は  
まことに淨土にむまるゝたねにてやはん  
べるらん、また地獄におつる業にてやはん  
べるらん、總じてもて存知せざるなり。たと  
ひ法然上人にすかされまいらせて、念佛し  
て地獄におちたりとも、さらに後悔すべか  
らずさふらふ。

(歎異抄)

# 他力宗教論

楠 龍 造 著

## 第一章 絶待他力は宗教の極致なり

比較的教學者は云ふ、概括して民族と宗教の關係を一瞥せば、印度日  
耳曼民族の宗教は絶待をみとめ之と冥合せんとするにあり、セム民族  
の宗教は信仰の對象に信頼せんとするにありと。これ或は然らん、吾人  
深く之を思ふに、宗教信仰の精髓は唯一にして二もなく亦三もなく簡  
明直截のものなり。恰も水に谿水あり河水あり湖水あり海水あり、清水  
あり濁水あり、清淨なるあり腐敗せるあり、動搖せるものあり寂然たる  
ものあり、千秋萬態其狀決して一ならずと雖、これ皆其周圍の形勢事情



の差別によりて或は幾多混合物の夾雜によりて斯の如き相違を來すものにして、本來水の性質はと問はゞH<sub>2</sub>Oの化合の一のみにあるが如し、宗教學者は古來野蠻時代の庶物崇拜の宗教より、近時汎神教に至る迄の發達變化を論じ、信仰の對象の差異を論じ、儀式奉祠の差異を論じ、信仰の差異を論じ、以て宗教及び信仰の發達變化の迹を示せしより、世は靡然として之に應じ、一も二もなく宗教及び信仰は其數種々ありて、然も發達變化止む時なく、決して一定不變の信仰なるものあるなく、完全圓滿せる宗教なるものあるなく、皆時代精神の產物にして、相待的價值不安定的價值を有するに過ぎずとせり、こはあなかも無理の思想にはあらざるなり、試に宗教史を繙て一考し來れば宗教の種々變化し來れることは事實なり、信仰儀式の變化し來れることも事實なり、吾人は明白なる事實に向て少しも之を否定せんと欲するものにあらざるなり、上に陳述せる宗教學者の説は、恰も水には澄徹鏡の如き水あり、汚濁

泥の如き水あり、赤き水あり、黒き水あり、白き水あり、青き水あり、草葉にやとれる水あり、路間をながるゝ水あり、壁立千仞の絶頂より飛電直下する水あり、青藍を湛へたる湖水あり、渺々無限の大洋の水ありと云ふ如きものにして、こは事實なれば誰人も否定し能はざる所なり、されど吾人試に問はんと欲するものあり、水にはそれ斯くの如く多様の變化異狀ありと雖、この幾多の變化異狀の水中一の動すべからざる共通の性質なきや、周圍の形勢事情より受けたる變化と他の夾雜物より得たる變化を除けよ、水と云ふに動す可らざる一の共通の性質あるを發見せん、宗教と云ふ中にも、庶物崇拜教あり、多神教あり、一神教あり、汎神教あり、其數決して一ならず、隨て其信する所祭る所事ふる所教ゆる所決して一にあらざるなり、然し乍ら各宗教に就て其周圍の形勢事情なるもの、即ち當代の風俗なり、文學なり、政治法律なり、また山河の形勢なり、天文氣象なるもの、の宗教に及ぼせる影響、其他外界より來せる種々の



影○響○を○除○き○直○に○宗○教○と○云○は○れ○信○仰○と○云○は○る○の○所○の○も○の○本○質○を○求○め○  
 ば○各○宗○教○に○通○じ○て○動○す○べ○か○ら○ざ○る○の○性○質○を○發○見○せ○ん○か○な○  
 其○の○一○の○性○質○と○は○何○ぞ○や○古○來○宗○教○に○關○す○る○定○義○是○れ○多○く○十○指○を○屈○  
 する○も○猶○ほ○あ○ま○り○あ○り○と○雖○ま○た○世○人○よ○り○陳○腐○の○笑○を○受○く○る○も○吾○人○は○  
 斷○じ○て○宗○教○の○動○す○べ○か○ら○ざ○る○一○の○性○質○は○有○限○無○限○の○一○致○に○あ○る○こ○と○  
 を○主○張○せ○ん○と○欲○す○る○も○の○な○り○此○の○有○限○無○限○の○一○致○な○る○も○の○に○就○て○多○  
 神○教○に○云○ふ○所○の○無○限○は○一○神○教○に○云○ふ○所○の○無○限○と○こ○と○な○り○一○神○教○に○云○  
 ふ○所○の○無○限○は○汎○神○教○に○云○ふ○所○の○無○限○と○こ○と○な○る○も○の○あ○り○ま○た○其○有○限○  
 な○る○も○の○性○質○に○就○て○も○各○宗○教○區○々○多○岐○に○分○れ○た○り○解○脫○を○要○す○る○所○  
 の○吾○人○彼○救○濟○者○な○る○所○の○吾○人○有○限○な○る○吾○人○人○類○に○在○て○は○其○機○類○種○々○  
 あ○る○こ○と○を○許○す○べ○き○も○完○全○圓○滿○な○る○無○限○其○物○に○至○て○は○決○し○て○多○數○の○  
 種○類○の○存○在○を○許○す○べ○き○に○あ○ら○ず○何○と○な○れ○ば○完○全○圓○滿○な○る○無○限○其○物○は○  
 唯○一○に○じ○て○無○二○亦○無○三○な○る○べ○き○を○以○て○な○り○若○し○二○も○三○も○あ○り○と○云○は○

ば○是○れ○既○に○完○全○圓○滿○な○る○無○限○と○云○ふ○能○は○さ○る○な○り○果○し○て○然○ら○ば○多○神○  
 教○に○云○ふ○所○の○有○限○無○限○の○一○致○眞○實○な○ら○ば○一○神○教○に○云○ふ○所○の○有○限○無○限○  
 の○一○致○眞○實○な○ら○ざ○る○べ○く○一○神○教○に○云○ふ○所○の○有○限○無○限○の○一○致○眞○實○な○ら○  
 ば○汎○神○教○に○云○ふ○所○の○有○限○無○限○の○一○致○眞○實○に○あ○ら○ざ○る○べ○し○若○し○斯○く○の○  
 如○く○な○ら○ん○か○あ○る○一○種○の○宗○教○の○み○眞○實○に○し○て○其○他○は○皆○悉○く○迷○妄○取○る○  
 に○足○ら○ず○と○云○ふ○に○決○歸○す○吾○人○は○斯○の○如○く○信○ず○る○能○は○さ○る○も○の○な○り○谿○  
 間○の○水○も○水○な○ら○ず○や○湖○海○の○水○も○水○な○ら○ず○や○清○水○も○水○な○ら○ず○や○濁○水○も○  
 水○な○ら○ず○や○よ○し○清○濁○純○雜○の○差○異○あ○れ○ば○と○て○ひ○と○し○く○水○な○ら○ず○や○吾○人○  
 は○多○神○教○に○在○て○は○無○限○絶○待○そ○か○信○仰○の○對○象○た○る○多○神○中○に○あ○ら○は○れ○有○  
 限○の○吾○人○を○し○て○安○慰○を○得○せ○し○む○る○こ○と○を○信○じ○一○神○教○に○あ○つ○て○は○絶○待○  
 無○限○一○神○中○に○あ○ら○は○れ○吾○人○と○一○致○し○て○安○慰○を○得○せ○し○む○る○こ○と○を○信○じ○  
 汎○神○教○に○在○て○は○絶○待○無○限○萬○有○中○に○あ○ら○は○れ○吾○人○と○一○致○し○て○安○慰○を○得○  
 せ○し○め○玉○ふ○こ○と○を○信○じ○或○は○木○石○の○上○に○植○物○の○上○に○動○物○の○上○に○あ○ら○は○



れ吾人信仰の對象となることを信ずるものなり何づれの宗教にせよ如何なる種類の宗教にせよ其宗教によりて確乎たる安心を得たるものあるとせんかそは其宗教に於ける信仰の對象を透ふしてあらはれたる絶待無限と有限なる吾人と一致したるときのみを得べきものたるなり斯の如く觀察し來れば如何に宗教は發達變化するも動すべからざる根本精髓は有限無限の一致にありと云ふこと豈に難乎たる斯案ならずやこれ恰も水はH<sub>2</sub>Oの化合なりと云ふよりも猶ほ確實なり水はH<sub>2</sub>Oの化合なりと云ふは今日の化學上認めて以て正當の見解となすも他日幾多研究の結果として其學說の一變するなきを保する能はず然るに宗教上の安心は全然主觀的事實にして疑はんと欲するも疑ふこと能はざる確實を有せり相待的價值を有するにあらずして絶對的價值を有せり文人は之を否認するも智者學者は之を否認するも世界の輿論は之を否認するもひとり自己は疑はんと欲しても疑ふべ

からざるものありこれ古來の大宗教家釋迦と云ひ基督と云ひマホメットと云ひ龍樹と云ひ提婆と云ひポールと云ひルイーナルと云ひ如何なる迫害をも避けず如何なる窮苦をも辭せず水火に投じて死するをも辭せざるもの其根原誠に此處にありて存せり信仰の本領また此處にありて存せり然るに宗教家と稱する人にして信仰の相對的なることを云ひ不安定なることを云ひ時代智識と共に推移すると云ふに至ては局外の批評としては或は聞くべきも信仰ある宗教家は果して斯くの如く感せらるや吾人大に惑はざるを得ざるなり之を要するに吾人は宗教の精髓の有限無限の一致にあることを信するものなり宗教は主觀的事實にして絶對的價值あることを信するものなり  
上來陳述せる宗教の精髓なる有限無限の一致は二様の形式を以て各宗教にあらはる其一是信仰の對象に對する信賴依憑としてあらはれ其一是信仰の對象に對する認識冥合としてあらはる佛教に於ける



他方は信頼依憑の方面を代表し、自力門は認識冥合を代表するものなり。耶蘇教に於けるクエーカー宗の如きは認識冥合の方面を代表し、餘の宗派は多く皆信頼依憑の方面を代表せり。其他幾多の宗教を檢尋するも其教うる所精粗純雜の差異こそあれ、悉く此二に納まらざるなきなり。斯くの如く信仰の状態二様の方面に分れたりと雖、更に深く其本源に溯るときは、有限無限の一致と云ふ一道に歸す。之をたとへば、信頼信憑の宗教意識は稚兒の全心をあげて慈親に信頼するが如きものあり。認識冥合の宗教意識は、人成長して慈親の意を認め之に合したる行動をなすが如きものあり。稚兒の全心をあげて慈親に信頼するは、自己を没して慈親に皈依するなり。一任するなり。全然他力なり。また彼慈親の意を認識して之に合せる行動をなすと云ふも、慈親の意に隨へる行動なれば、自己の行動にあらず。慈親の行動なり。これまた他力なり。嗚呼、宗教の門に二ありと雖、其實をきはむれば、自己を没して、絶待に皈依するに

あり。自力を拂却して他方に皈依するにあり。小我をすて大我に皈依するにあり。紛々たる波浪漫にさはくをやめて、湛然寂靜たる水に皈依するにあり。耳目鼻口互に我を執するを止めて、一身全體の命に従ふにあり。殊に宗教は老病死に苦惱する人の呼聲なり。智慧眼くらくして曠野に迷ふ人の叫聲なり。徳なく善根なく我身の荒涼を嘆想する人の呼聲なり。塵事紛々向上の一路をふむ能はざる人の叫聲なり。されば我が親鸞聖人の教へ玉へる純他力絶待依憑これ豈宗教の精髓中の精髓を道破せるものにあらずして何ぞや。



第二章 一切の門戸は他力大道に達す

いにしへ法然上人の弟子に隨蓮なる人あり常に上人につかへて配所にも隨ひ師弟の情殊に厚かりき上人臨終の際隨蓮を召して云く念佛は様なきを様とするなりたたひらに稱名の行をもはらにすべしと隨蓮二心なく師命を信じ念佛三昧に日を送れり上人没後三ヶ年を経遺弟等の間に議論あり曰く念佛するとも三心具足せずば往生かなふべからすと隨蓮云く故聖人は義なきを義とすたたひらに佛語を信じて念佛せよとてまたく三心のおほせられざりきと彼の人々云く三は愚癡なる人に對しての方便なり經論祖釋の意分明に三心具足せざれば往生かなふべからざる由を説かれたりと隨蓮爲にさることもあらんかと云ふ疑惑を起し一二ヶ月心安からずものうくて念佛も申さざりける一夜夢らく法勝寺の西門に至りみれば池中の蓮華今やさ

かりに開き清淨香潔其風色云ふべからざるものあり既にして西門に至れば數多の僧衆列坐して淨土の法門を談せらる隨蓮廊に上りて四方をながむれば故上人(法然上人)北坐にて南にむきて居玉ひければ之に禮伏せり上人隨蓮をみて近く來れと云ふおそるく傍に近く上人云く汝このほどどころになげくことありゆめくわづらふことなかれと隨蓮思へらく我心中の疑惑未だ嘗て人に話さず上人如何にして之を知り玉ふかと具さに日頃の不審を述べその時上人云くたとへばひかことをいふものありてあのいけの蓮華を蓮華にはあらずむめそさくらそといはばなんぢは信してんやと隨蓮まふしていはいく現に蓮華にてはんべりいかにひとまふすともいかてかむめさくらとはおもひはんへらんと其時上人またのたまはく念佛の義またかくの如し源空かなんぢにをしへしことばを信せば蓮華といはんかことしふかく信じて念佛をまうすべしとなり惡義邪義のむめさくらをばゆめく



信すべからず。かくして夢はさめぬ。隨蓮不思議の思をなすこときはま  
りなく、日頃の不審悉く晴れ、昔の御教示も相違なかりけりと喜び、念佛  
の外二心なく、八旬に及て往生の素懐をとけりき。

吾人此隨蓮の一説話につき、大なる示教を得たり。何そや、宗教上の信  
仰なるものは、池中に鮮にさける紅白の蓮華をみて、こは蓮華なりと確  
認して動すへからざる如く、他人は如何に梅と稱し櫻と呼ぶも、他人は  
如何に自己の信仰を稱して、誤謬とよひ愚昧と叫ぶも、其所信牢として  
動すへからざるものあり。嗚呼、宗教は人心の根底に閃めける自覺なり、  
小我にあらはれたる大我の光明なり、凡心にやとれる佛心の顯現なり、  
虚妄界より憧憬せる實在の別天地なり、唯それ自覺なり、光明なり、實在  
なり、常住なり、精神なり、生命なり、智慧なり、慈悲なり、以て生老病死以外  
に超然たるべく、以て憂喜苦樂以外に脱然たるへし、而して如何にして  
此自覺に到達すへきか、如何にして此實在の別天地に入るへきか、如何

にして常住の生命を得へきか、如何にして光明無量壽命既量たるべき  
か、彼れ隨蓮は師法然上人の言を確信することによりて、此地位に到達  
せり。然り宗教的自覺に到達したる人の言に隨へば、自己も同一の宗教  
的自覺に到達するを得へし、實在の別天地に入れる人の言に隨へば、自  
己も同一の實在別天地に入るを得べし、常住の生命を得べし、これ誠に  
獲信の第一義なり、最捷徑なり、吾人は此意義に於て我親鸞聖人の言と  
して、『嘆異鈔』にあらはれたる一文赫々として十方を照し、牢として千歳  
不磨の眞理たるを知る、聞け求道の我友。

各々十餘箇國のさかひをこえて、身命をかへりみすしてたつねきた  
らしめたまふ御こゝろさし、ひとへに往生極樂のみちをとひきかん  
がためなり。しかるに念佛よりほかに往生のみちをも存知し、また法  
文等をもしりたるらんと、ころにくくおほしめしておはしまして  
はんへらんはおほきなるあやまりなり。もししからは南都北嶺にも、



ゆゆしき學生たちおほく座せられてさうらふなれば、かのひとくにもあひたてまつりて、往生の要よく／＼きかるへきなり。親鸞におきては、ただ念佛し彌陀にたすけられまいらすへしとよきひとのおほせをかうふりて信するほかに別の仔細なきなり。念佛はまことに淨土にむまるたねにてやはんへらんまた地獄におつへき業にてやはんへらん。總してもて存知せざるなり。たとひ法然上人にかされまいらせて念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すへからずさふらふ。そのゆへは自餘の行をばげみても、佛になるへかりける身か、念佛をまふして地獄にもおちてさふらふはこそすかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ。いつれの行もおよひかたき身なれば、とても地獄は一定す。みかそかし、彌陀の本願まことにおはしまさは、善導の御釋虚言したまふへからず、善導の御釋まことにおはしまさは、善導の御釋虚言したまふへからず、善導の御釋まこととならば、法然

のおほせそらことならんや、法然のおほせまことならは、親鸞かまうすむねまたもてむなしかるへからずさうらふ。詮するところ、恐身か信心におきては、かくの如し、このうへは念佛をとりて信したてまつらんと、またすてんと、も面目の御はからひなり(嘆異鈔)。

彌陀の本願を信するものは、釋尊の説教を疑ふへからず、釋尊の説教を信するものは、善導の御釋を疑ふへからず、善導の御釋を信するものは、法然上人のおほせを疑ふへからず、法然上人の仰を信するものは、親鸞聖人の言を疑ふへからざるなり。獲信の第一關門は、聞の一字にあり、されはこそ聞其名號信心歡喜と云ひ、聞即信と云ひ、聞の一字淨土門他力教に於て千金の價值を有せり。宗教に於て相承を尊ぶ所以のもの、實は此處にあり、生命を以て生命を傳へ、精神を以て精神を傳へ、生ける血を以て生ける血を傳へ、信を以て信を傳ふるものなり。他の文字章句の註釋に相承の如何を争ひ、學解論議の研究に相承を提起するか如きは、



誠に愚と云はさるへからず見よ天動説か地動説に變するも日月星辰は依然として我を照すにあらすや生命に關する生物學上の見解如何に多きも生命は依然として存在するにあらすや相承の眞意義は事實を以て事實を傳ふるものなり論議註釋の上にはあらさるなり

他力救済の自覺に到達する大道唯だそれ以信傳信にありと雖他力救済の自覺は本來人心の根底に基せば何れの方面より進むも此自覺に到達するに至る吾人は理論を重する人に理論を棄てよと云はず研究を重する人に研究を棄てよといはず常識を重する人に常識を棄てよと云はず修善を重する人に修善を棄てよと云はず唯だ云はん唯だ深く最後まで進め然らば則ち他力救済の自覺に到達するに至らんのみと古徳般若の大智慧を論じて曰く

般若如大火聚四面不可近

又曰く

般若如清凉池四面皆可入

是れ豈般若の智慧のみならんや他力救済の大道また然り若しそれ廢捨の方面より云はば智慧を捨て才能を捨て修善を捨て積徳をすて罪障を忘れ煩惱を忘れ善惡共に忘れ一毫も自己にたのむ所のものあるべからず若し夫れ自己に頼む所執着する所あれば他力攝取の恩寵に接するを得ざるなりされど他の一面より云はば智慧ある人は中途に止まらずして最後迄其智慧をみかけ智慧のきはまる所一轉して他力の大道に入らん徳ある人はあらんかぎり徳をつまんとつとめよ其力の微弱なるを悟るとき一轉して他力の大道に入らん常識を重する人は萬事を常識にて判斷せんとつとめよ其不可能を知るに及んで一轉して他力の大道に入らん才能を有する人及ぶかぎり才能を運用せよ其能の頼むに足らざるを知るとき一轉して他力の大道に入らん形而上學を喜ぶ人は深く冥想せよ物理學者は深く物體を考へよ勢力を



考へよ分子を考へよ、化學者は深く化合力を考へよ、原子を考へよ、倫理學者は深く善を考へよ、惡を考へよ、美學者は深く美を考へよ、調和を考へよ、崇高を考へよ、唯だ深く／＼考へよ、此處に他力の光明をみとむるに至らん、聞かすや、我彌陀佛は十八十九二十の三願をならべ誓ひたるにあらすや、釋迦佛は一佛乘に入らしむるために八萬四千の門戸を開きたるにあらすや、他力の門戸至る所として、存せざるなきなり。

### 第三章 常識と他力信仰

彼の西山に登て其薇を采る、暴を以て暴に易ふ、其非を知らず、神農虞夏忽焉として没したり、我れ安くに適て歸せん、于嗟徂かん命の衰へなるかな『伯夷列傳』

これ千載の義人、伯夷、叔齊、周を逃れ、首陽山上に死せんとする時、その心中の至誠を吐露せる遺歌にあらすや、嗚呼、義に堅きこと、彼が如く、清廉潔白なること、彼が如く、其風をさくもの貧夫も廉に、惰夫も立たんとするものあり、我れ此點に於て、夷齊を敬慕すること、敢て人後に落つるものにあらす、されど翻て之を思ふに、彼は道義の人にして、宗教の人にあらす、アキラメの人にして、安立の人にあらす、神農、虞、夏、忽焉として没したり、我れ安くに適て歸せん、于嗟、徂かん命の衰へたるかな、と云ふもの、運命の衰薄を嘆くの聲にして、前途に光明をみとむるの聲にあらざ



るなり、自己のみの清白淨潔を示す語にして无差別平等の絶待を悟れる語にあらざるなり。これやがて眞正の安立は道義以上にあることを示すものにあらずや、司馬遷論して云く、

これに依て之を觀れば怨みたるかあらずや、或人曰く天道親なし、常に善人にくみす、伯夷叔齊の如きは善人と云ふべきものかあらずや、仁を積み行を潔すること此の如し、而して餓死せり、且つ七十子の徒に仲尼獨り顔淵をすゝめて學を好むとなせり、然れども回や屢空しく糟糠だも厭かず、而して卒に蚤く夭す、天の善人に報施するそれ如何ぞや、盜跖は日に不幸を殺し、人の肉を肝にす、暴戾恣睢にして、黨をあつむること數千人、天下に横行す、竟に壽を以て終れり、是れ何の徳に違ふや、これ其尤も大に彰明較著なるものなり、近世に至る若きは、操行不軌にして専ら忌諱を犯すもの、而も身を終るまで逸樂富厚累世絶へず、或は地を擇て之をふみ、時ありて然して後に言を出す、行く

に徑に、公正に非れば憤を生せず、而も禍災に遇へるものありて數ふべからざるなり、予甚だ感ひぬ、儻くは所謂天道是耶非耶、伯夷列傳、

若し夫れ常識を標準として、社會の制度なるもの、制裁なるもの、輿論なるもの、習慣なるもの、法律なるもの、倫理なるものを觀察し、其趨向する所、其決歸する所のものをみは、蓋し十中の八九は所謂天道是耶非耶の嘆を發せざるを得ざるに至らん、これ誠に常識は其名の示す如く、平穩无事通常一般のことを判斷し處理し得べきも、非常大事變に至りては到底之を判斷し之を處理し得ざるものなり、常識を以て萬事を判斷し得ると思ふは大誤謬なり、若し夫れ生死と云ひ、吉凶禍福と云ひ、運命と云ひ、善惡と云ひ、皆な常識を以て判定し得るものなりと云ふ人あらば、其人は名を常識に托せるも、實は常識以上に淵源し來れることを知らざるか、或は常識なる意義を誤解せるものなり、司馬遷の夷齊の一生



涯を眺め、所謂天道是耶非耶と嘆息せしもの常識上の立論より来るべき當然の結果のみ、常識の價值此處に至て知るべきのみ、吾人は『伯夷列傳』をよみ、宗教なき義人の逆境に處して如何なる心情を有し、死生の際にありて如何なる安立あるやを知ることを得たり、また常識上より人生を達觀すれば、如何なる結論に到達すべきかを知り得たり、吾人は人生にありて常識の重要にして缺くべからざることを知る、人事の多くは之に依て判断せられ、之に依て實行せらるることを知る、吾人は常識を缺乏せる人の不健全なることを知る、されど吾人は真正の安立を得んと欲すれば、常識以上に到達せざるべからざるを信じ、順逆兩境に際して寂靜安穩の心地を得んと欲すれば、常識以上に到達せざるべからざるを信じ、常識は決して確乎不動の基礎を吾人に與ふるものにあらずるを信するものなり。

通常のことと常識にて判定し得べしとせば、非常のことと非常識により

て之を決定し之を處理せざるべからず、見よ婆羅門教にありては、神智なるものと俗智なるものとを立て、究竟的安心の境に到達するには、神智によらざるべからざることを主張するにあらずや、佛教には有漏智と无漏智の二智を立て、大覺の地位に到達するには、无漏智によらざるべからざることを談ずるにあらずや、プラトは吾人の靈魂に二の性質ありて、其高等なる「エノス」は觀念世界に關係し、其下等なる「シロミン」エピシメチエンは感覺世界に關係すと云ふは、豈に味ふべき語にあらずや、吾人敢て幽遠神秘の談を喜ぶにあらず、實際上斯の如きものあるを信するなり、久しく魚肆にあるもの魚臭を知らず、常に喧燥場裡にあるもの喧燥を知らず、紛々たる憂喜苦樂擾々たる利害得失の渦旋中にありて、之より得たる常識なるもの、豈に悠遠廣大横に十方を渡り、豈に三世に徹し、此處に生死なく、苦樂なき寂靜妙樂の大天地を知らんや、されど船に乗らんとするもの、先づ其岸邊にまで歩まざるべからず、常識



によりて進行せば其常識のきはまる所必ずや常識以上の宗教妙樂界に入らざるべからざるをみん。

吾人は今圓滿なる常識家の代表者として、支那の孔子、希臘のソクラテス、の二聖人をあげ、其常識の根底として他力宗教(廣義に於て)の存在せることを辯明せん。孔子は周の靈王二十一年に生れ、同敬王四十一年に没せり、即ち西歴紀元前五五十一年に生れ、同四百七十九年に没せし人なり、其人たるや極めて常識的圓滿の偉聖、其説く所や高遠幽玄の哲學にあらず、法政形名の學にあらず、天文地理にあらず、技藝文學にあらず、當時戰國紛亂の状態として、社會の紀綱此處に破れ、倫常の道此處にすたれ、蓬麻の風に亂れたる如きものありし故、慨然として堯舜を祖述し、文武を憲章し、常識に根據せる倫理を説き、政治を説き、ひたすらそが復古運動に従事せり。孔子の圓滿なる學識的偉聖なることは、『論語』一部をよむも明白に知ることを得。

徳を修めざる、學の講せざる、義を聞て従ふ能はざる、不善を改むる能はざる、此四者は是れ吾が憂なり。『論語』

予は生れながらにして學を知るものにあらず、唯古を好みて之を求むるに敏なるものなり。『同上』。

子禽子貢に問て云く、天子の是邦に至るや、必ず其政を聞く、之を求むるか、抑之を與ふるか、子貢曰く、夫子は温良恭儉讓以て之を得たり、天子の之を求むるや、それこれ人の之を求むるに異なるか。『同上』。

子曰く、我を知るなきかな、子貢曰く、何すれぞ、それ子を知るなからんや、子曰く、天を怨み、人を咎めず、下學して上達し、我を知るものは天、夫れ天か。『同上』。

孔子は誠に斯の如き常識偉聖なりしなり、されど常識は以て最後の根據となすに足らず、常識のきはまる所別に不動の根據を求めざるべからざるなり、見すや孔子は非常の時に臨み、生死岸頭に立つ時、常に天



を呼び天に自己を托せることを天は彼の宗教なり彼は自己をおげて天に托せり自己の爲す所は自己之を爲すにあらずして天之をなさしむると信せりこれ明に他方宗教の精神にあらずや。

子匡に畏る曰く文王既に没す文茲に在らず天の斯文を喪さんとするや後死のもの斯文に興るを得ず天の斯文を喪さざるや匡人それ子を如何『論語』。

天徳を手に生せば桓魋それ子を如何『同上』。  
人事を盡して天命を待つ『同上』。

然り彼は天によりて立ち天によりて安せり人事を盡して天命を待つの一語其究竟的安心を道破して餘蘊なきもの常識を過程としての究竟立脚地みな此の一語に飯結せざるなきなり吾人は孔子を以て常識より入れる他方安心を得たる人なることを信するものなり。

ソクラテスは西暦紀元前四百七十年に生れ同三百九十九年に従容

として毒杯を仰て死せる希臘の大聖人なり當時希臘は幾多の戦亂打ちつゞき國家の盛衰は波浪の上下する如きものありまた詭辯學派の徒個人は萬物の尺度なりと唱へ當時の倫理法律の无意義なるを主張したれば其弊や大に民心を擾亂して社會の風紀秩序を紊亂せりソクラテスは此の如き時勢に處して一意此衰勢を挽回せんとつとめ路傍または公園にありて諄々として説き至善の何物たるかを明さんとつとめたり之を明すの法所謂「ソクラチックアイロニー」により問答の末自己の无智を自覺せしめ然る後自己の主張を了悟せしむソクラテスの行爲一見尋常の規矩以外に脱するが如しと雖其心國家の法律社會の秩序を重し倫理綱常の衰頹を挽回せんとつとめたるが故哲學者と稱するよりも寧ろ常識的偉聖と稱するの妥當なるを見る而して此常識的偉聖の中心の根據となれるものは一は「デルハイ」の神託に萬民の賢はソクラテスなりとありしをソ氏百方思索探究の極世人は皆自己の



無知を知らざれども自己は自己の無知を知ること、これ世人より超越せる所以なることを自覚せること、一は自己の行爲はデーモンの命令によると自覚せること、此二はこれソクラテスをしてソクラテスならしめし根原また他力宗教の精神此處にあり、佛教淨土教の機法二種の深信なるもの、ソクラテスの二種の自覚の一層深きものと云ふを得べし、されば常識は遂に宗教の門に入らざれば止まず、之を東西の二聖に徴するも、最もその明著なるを覺ふ、そか性質及び境遇の如何にもよるべしと雖、ソクラテスは孔子よりも一層宗教的にして、死の問題に就て殊に切實なり。

眞正の哲學者は死の研究を以て彼等全生涯の全事業となす (Crito and Phaedo)

と云ひ、又彼死刑の宣告を受けたる後、ハルモセニスに告げて、何故汝は世界に於て生活を繼續するよりも、此世に別離を告ぐるこ

と自己にとりて最善なりとする神の命を驚愕しなすか

(The memorable Thoughts of Socrates)

と云ひ従容和平死をみる故郷に歸るが如くなるもの豈に欽慕すべきのきはみにあらずや。

以上陳述し來れる如く、常識の根底として必ず宗教を要す、然も其宗教たるや、他力宗教なり、孔子に於て然り、ソクラテスに於て然り、人事を盡して天命を待つと云ふもの、常識極まる所、宗教の靈界に入れるを示すものにあらずして、何ぞや、ソクラテスの自己の無智をさと、り、死生をデーモンの命に一任すると云ふもの、これ豈自己を没して、如來他力に歸入せるものにあらずや、嗚呼、常識のきはまる所、俗諦智の歸する所、他力宗教の基礎に立たずんば、一步たも進む余地なきに至らん、孔子の宗教をみとめざる人は、孔子を解せざる人なる哉、ソクラテスの宗教をみとめざる人は、ソクラテスを解せざる人なる哉。



## 第四章 倫理と他力信仰

盧山の中にあるものは以て其全景を見る能はず山を去り遠く眺めて始て其眞容に接するを得べし。唯に人事園内に醒醒たる者到底人生の眞意義の如何なるものなりやを觀る能はず人事以上に超脱して始て人生の眞義を達觀するを得べけん。實在を寫象して倫理的となすものは淺薄なるかな。人類は決し倫理に依て救濟され解脱することを得るものにあらず。生病老死の苦惱は倫理に依て解決を得ず。顔回の短命盜跖の福壽、ソクラテスの毒殺せられたる、ネロの榮華を極めたる、人生の不可思議の運命は倫理に依て解決を得ず。生の從來する所死の趨向する所倫理に依て解決を得ず。天に日月星辰の輝く所以地に山川草木の存する所以、倫理に依て解決を得ず。鳥の空に飛び魚の水に躍る所以、倫理に依て解決を得ず。嗚呼倫理は人と人との關係に於けるある一部

の行為を規定するものならずや。時所位と共に轉變止まざるものにあらずや。かかる部分的・一時的・相待的・變化的のもの、を以て宇宙の第一原理として安心立命を之に依托せんとするは、砂の上に家屋を建て、波浪の上に樓臺を築かんとするに似たらずや。雨降り風吹かば家屋此處に倒れ、波浪一度動搖すれば樓臺粉塵せざれば止まず、豈に危険のきはみにあらずや。こは唯に人事園内に局促して其見る所小なるか故未だ人生の眞義を達觀せざる過失によるのみ。

されば倫理を以て人生の究竟歸依處となすに至りては、全然之に首肯する能はざるものありと雖、人の世に生存して、人類相互の間に、自然に倫理的規約の生し來るは、水は方圓の器に隨て其形狀方圓となる如く、これ自然の事實なり、まぬかれんと欲してまぬかる能はざる事實なり。假令政府の支配を脱し、法律の制裁を顧みざる彼の盜賊と云ふもの、乞食と云ふものの如き、盜賊には盜賊仲間の倫理制裁あり、乞食には



乞食仲間の倫理制裁あり、全く自己一人にあらざるよりは全然倫理制  
 裁を脱却する能はざるものなり。若し此自然の事實をのかれんとつと  
 めんか、恰も生瓜を剝ぐ如く深大の苦惱に堪へざるものあらん。倫理制  
 裁に随ふ苦惱よりも更に一層甚しき苦惱あらん。然れども一たび宗教  
 の天地に入るときは、風光大に同じからざるものあり。然らば其風光は  
 如何、即ち他力宗教家の倫理に對する精神は如何なるものなるべきか。  
 想ふに重力の中心は唯一點にあり、人を支配する樞軸は唯一の信仰  
 唯一の主義にあり、倫理と宗教を二として共に必要なりとするは、これ  
 中心點を二にし、樞軸を二にせんとするものなり。豈に左支右吾を生せ  
 ざるを得んや。宗教をとり來りて倫理に皈せんとするは、根幹を擧して  
 枝葉に皈せんとするもの。豈本末顛倒せざるを得んや。他力を信する我  
 等に在ては、他力大道は吾人の唯一の信仰なり、唯一の主義なり、唯一の  
 支配者なり、唯一の光明なり。他力大道の外に人を見ず、國を見ず、父母を

見ず、兄弟姉妹を見ず、倫理法律を見ず、學術文藝を見ず、山嶽を見ず、河海  
 を見ず、草木を見ず、鳥獸を見ず、江月照し、松風吹く、是れ他力の大道なり。  
 「巴蜀雪消えて春水來る、是れ他力の大道なり。四時行はれ、萬物なる、是儘  
 他力の大道なり。君君たり、臣臣たり、父父たり、子子たり、是れ他力の大道  
 なり。衣のえりを御たたきありて、南無阿彌陀佛と仰せらるる、これ他力  
 の大道なり。御たたきをたたかれ、南無阿彌陀佛にもたれたるよし、仰せ  
 らるる、これ他力の大道なり。生に他力大道を見、老に他力大道を見、病に  
 他力大道を見、死に他力大道を見、笑ふときに他力の大道を見、泣くとき  
 に他力の大道を見、喜ぶときに他力の大道を見、怒るときに他力の大道  
 を見る、言語動靜坐作進退皆他力大道にあらざるなきを見るなり。之を  
 要するに他力教を奉ずるものに在ては、生前と死後とを問はず、皆他力  
 大道の中にあり、光明攝取の中にあるが故、他力大道の外倫理なきなり。  
 法律制度なきなり、他力大道の外別に倫理なるものを求めんが、これ中



心<sup>〇</sup>點<sup>〇</sup>を<sup>〇</sup>二<sup>〇</sup>に<sup>〇</sup>し<sup>〇</sup>信<sup>〇</sup>仰<sup>〇</sup>を<sup>〇</sup>二<sup>〇</sup>に<sup>〇</sup>し<sup>〇</sup>主<sup>〇</sup>義<sup>〇</sup>を<sup>〇</sup>二<sup>〇</sup>に<sup>〇</sup>せ<sup>〇</sup>ん<sup>〇</sup>と<sup>〇</sup>す<sup>〇</sup>る<sup>〇</sup>も<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>な<sup>〇</sup>り<sup>〇</sup>斯<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>如<sup>〇</sup>き<sup>〇</sup>  
 は<sup>〇</sup>豈<sup>〇</sup>に<sup>〇</sup>眞<sup>〇</sup>正<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>他<sup>〇</sup>力<sup>〇</sup>教<sup>〇</sup>者<sup>〇</sup>な<sup>〇</sup>ら<sup>〇</sup>ん<sup>〇</sup>や<sup>〇</sup>乞<sup>〇</sup>ふ<sup>〇</sup>た<sup>〇</sup>の<sup>〇</sup>一<sup>〇</sup>話<sup>〇</sup>に<sup>〇</sup>つ<sup>〇</sup>き<sup>〇</sup>て<sup>〇</sup>深<sup>〇</sup>く<sup>〇</sup>考<sup>〇</sup>へ<sup>〇</sup>よ<sup>〇</sup>。

親鸞聖人すみなれし東關を後にして、花洛の故郷に飯り、扶風馮翊と  
 ころくに移住したまひき、五條西洞院わたり、これ一の勝地なりと  
 て、しばらく居を占めたまふとありき。されば此頃いにしへに口決を  
 つたへ面受をとけし門徒等、各好をしたひ路をたづねて參集しき。そ  
 の頃常陸國那荷西郡大部郷に平太郎ながしと云ふ人あり、聖人の  
 訓を信して貳心なかりき。然るにあるとき、平太郎所務に駈られて、熊  
 野に詣づべしとて事のよしを尋ね申さんかために、聖人へまゐりた  
 るに、仰せられて云く、夫れ聖教萬差なり、いづれも機に相應すれば巨  
 益あり、但し末法の今時聖道門の修行におひては、成すべからず、則我  
 末法時中億々衆生起行修道末有一人得者といひ、唯有淨土一門可通  
 入路と云ふ、これ皆經釋の明文如來の金言なり、然るに今唯有淨土の

眞說に就て、忝くも、彼三國の祖師各此一宗を興行す此故愚禿勤ると  
 ころ更に私なし、然に一向專念の義は、往生の肝腑自宗の骨目なり、即  
 ち三經に隱顯ありと雖、文といひ義と云ひ、共に以て明なるおや、大經  
 の三輩にも一向と勸めて流通にはこれを彌勒に附屬し、觀經の九品  
 にもしばらく三心と説てこれまた阿難に附屬す、小經の一心遂に諸  
 佛これを證誠す、これによりて論主一心と判し、和尙一向と釋す、然れ  
 ば即ち何れの文によるとも一向專念の義を立すべからざるをや、證  
 誠殿の本地即ち今の教主なり、故にとてもかくても衆生に結縁の志  
 深きにより和光の垂跡を留たまふ、垂迹を止むる本意、唯結縁の群類  
 をして願海に引込せんとなり、然れば本地の誓願を信じて一向に念  
 佛をこととせん輩、公務にもしたがひ、領主にも驅仕して、其の靈地を  
 ふみ、その社廟に詣せんこと、更に自心の發起するところにあらず、然  
 れは垂迹に於て内壞虚假の身たりながら、あながちに賢善精進の威



儀を標すべからず、唯本地の誓約に任かすべし。これ敢て神威をかるしむるにあらざるなりと。これによりて平太郎熊野に参詣す、道の作法とりわき整ふる儀なし、唯常没の凡情に隨て更に不淨を刷カキクラーことなし、行住座臥に本願を仰ぎ造次顛沛に師教をまもるに、果して無爲に参着の夜、くたんの男夢に告て云く、證誠殿の扉を排きて衣冠正き俗人おほせられて云く、汝何そわれを忽緒して、汗穢不淨にして参詣するやと、そのとき彼俗人に對座して聖人忽爾としてまみえたまう、その詞にのたまはく、彼は善信が訓によつて念佛するものなりと。爰に俗人笏を正くしてことに敬屈の禮を著しつつ、かさねて述る處なしとみるほどに、夢さめおはりぬ、凡そ奇異のおもひをなすこといふべからず。『親鸞聖人傳繪』取意

こは一見一場の夢物語に過ぎざる如しと雖も、此中に深遠の意義の含蓄せることを味はざるべからず、古來日本國民の尤も尊崇置かざる

祖神も、他力教家の眼よりみはこれ他力の顯現にあらざるなきなり、他力大道以外に別に敬神の意義なきなり、此意義より云へば、他力大道以外に、豈に倫理あらんや、法律あらんや、國家あらんや、人類あらんや、然れば本地の誓願を信じて一向に念佛をことせんとせん輩公務にもしたがひ領主にも驅仕してその靈地をふみその社廟に詣せんこと更に自心の發起する所にあらずと何たる深遠の言語ぞ。

必無上淨信の曉に至れば

三有生死の雲晴れ

清淨無碍の光耀朗にして

一如法界の眞身顯る

發信稱名すれば光攝護し玉ふ

亦現生無量の徳を獲らむ

無邊難思の光斷えずして



更に時處諸縁を隔ることなし 『浄土文類聚鈔』  
 斯の如く誓願一佛乘他力信仰は一切の力なり一切の生命なり一切の光なり一切の實在なり此外に何を求めむる要なきなり否何を求めむる能はざるなり本願大智海に歸入すれば諸善なく萬行なく唯他力一味の別天地のみ此別天地に於て何ぞ故意に倫理道德の蛇足を畫くを用ひんや。

上來陳述せる所のものは他力宗教の別天地に入りたる人の風光なり佛心を得得したる時の状態なりされど求道の人始に宗教の天地に入らんとするや人類の倫理的性情と如何なる關係を有するものなりやを討尋するに若し修善を全うして始て宗教の門に入り得べしと云はゞ誰一人として宗教の門に入るものなからん修むれば修むる程遠かるは善の理想ならずや磨けば磨く程煩惱の止み難きを感じるは吾人心中の状態ならずや恰も腐敗せる死狗を洗濯するに恒河の水を盡

すも之を清め能はざるが如し故に善を全うして始て宗教の門に入ると云はゞ遂に誰人も宗教に入るの期なからん然らば善を捨て義を擲て惡逆無道の人となりて始て宗教の門に入るを得べきかされど吾人の一切の倫理的關係を放擲し去ると云ふはこれ到底不可能のことなりことさら之を放擲せんとすればこれまた如何に大なる苦惱ぞやこれ人類天然の至情に背けるものなり社會の制裁を脱却せる彼盜賊の如きすら既に一種の倫理制裁あるにあらずや乞食の如きすら一種の倫理制裁あるにあらずや然れば則ち吾人の宗教に入らんとするや此倫理的性情を如何にすべきや吾人は此倫理的性情佛陀の慈光に照され宿縁中に萌すとき他力宗教に入る一の過程たるを信す父母の慈悲を感じることを深きものはより一層無限矜哀の佛陀の慈悲に感ずるものなることを信す常に自己道心の微弱なるを感じるもの佛陀慈光の上にいよいよ罪惡深重の感切なることを信す佛陀は無限の智慧な



り慈悲なり、佛陀の光明我等を照すとき通常世間に云ふ所の倫理的性情なるもの深沈痛切の罪惡感となり、自己のたのむに足らざるを自覺するに至る此意義に於て倫理的性情は宗教に入るの一過程たり、吾人は博愛の人を尊ぶ、正義の人を尊ぶ、忠子仁義の人を尊ぶ、温良恭謙の人を尊ぶ、されど吾人はやゝもすれば有漏微弱の少善に執着して、眞正に自己の何物たるやを顧みざるを悲まざるを得ず、然るに佛陀の光明降て是等の人の胸に入るとき、少善執着の妄情洗ひ去られ、最もよく自己の何物たるを感じ、偉大無限の佛陀の靈性に自己を投托せんとす、世に所謂惡人なるもの決して倫理的性情なきにあらず、倫理的性情は屢々倫理的行動をなさんとしたれども、他の猛烈なる煩惱のため、其一隅に潜みたり、しなり、其倫理的性情、佛陀の慈光に照さるゝや、深沈なる猛烈なる罪惡感と化し、機の深信固く、定り、直に佛陀の胸裡に自己を忘る、此意義に於て、倫理的性情は宗教の天地に入る一過程たらずんばあらず。

之を要するに、求道者にとりては、倫理的性情なるものは、

(一) 善を積まんとして能はず、善を止めんとして能はざるは、倫理的性情より生ずる苦痛なり。

(二) 倫理的性情、佛陀の慈光に照さるとき、深沈なる罪惡感と化して、宗教の門に入る。

トルストイ氏其「宗教及道德論」に曰く。

宗教は人類が無限の宇宙及び本源に對せる關係なり。

道德は唯た此關係より導かれたる生活の永久の指導なり。

こは能く宗教道德の區別を明白にせるものなり、されと純宗教上より之を觀察すれば、人生を指導するもの唯一の宗教あるのみ、決して此二者を區別するの要なきなり。



## 第五章 智識と他力信仰

嘗て希臘、デルハイの神託に、人間の最賢者はソクラテスなりとありき、ソクラテス之を聞き如何に之を考案するも、自己の最賢たる所以を見出す能はず、此處に於て熟考の末思らく、世に所謂智者賢者と稱する人と真理の如何を論議せば、自己の賢なるか不賢なるかを或は知ることを得んかと。則ち當時の智者賢者を尋ねて之と真理を問答するも、彼等はイツモンクラテスの鋭鋒に敵しかね、口を杜いて又争ふ能はざるに至るは常の事なりしか、かくてソクラテスは心中動すべからざる一の決論を得たり、そは世の智者賢者と稱する人々は、自らウエボレて賢なりと稱せども、我は我が愚なることを知る、これ我が最賢なる所以なりと。嗚呼、眞智は無智なるかな、無智を悟るは眞智なるかな。

世に天文學ありて天體を研究し、地質學ありて地質を研究し、動植物

學ありて動植物を研究し、心理學あり倫理學あり社會學あり美學あり、皆各々其對象に對し之を研究して其真理を明白にするものなり、是等の智識は敢て智識ならずとは云はず、されどいづれも皆部分的蓋然的にして完全なる智識とは云ふ能はざるなり、況んや其既知の部分は大海の一粟なれば、未知の部分は砂石一粒に對する空間の無限大に比すべからずや、世に半吞の學者ありて云く、天上地下一切の事物知らざるなしと、自ら智識ありと稱するものは無學を表するものなり、眞の研究者は眞に自己の無智を悟れるものなり、學べば學ぶ程自己の無智の知らるゝものなり、考ふれば考ふる程自己の微弱なることが知らるるものなり。

他力宗教の一門は自己は無智なりてふ自覺によりて開かる。八宗兼學智慧第一と稱せられたる法然上人は、自ら稱して愚癡無智の法然坊と云ひき、親鸞上人は、愚禿親鸞と稱しき。古今諸師の諸説を措定し玉へ



る善導大師は我等愚癡身劫來流轉と云ひき天台の大徳源信僧都は予  
 が如き頑魯の者と云ひき嗚呼此愚癡頑魯の自覺是等諸上人をして他  
 力宗教の大天地に入らしめ如來法爾の妙光に攝するを得せしめぬ自  
 己の愚を悟る此處に於て無効の自力執情なく憍慢自ら恃むの心なし  
 見すや清虚無一物の水に月來て影をやとすを空虛なるコップに酒を  
 入れ水を入れ得べきを愚癡を悟つて自力をはなれたる我心に如來他  
 力の慈悲本願あらはれ來て我をして我愚なれとも如來他力によりて  
 生死を透脱するの智あるに至らしめ我闇昧なれとも如來他力により  
 て憂悲苦惱中に大安の光明をみとむるに至らしめ無智の人化して大  
 智の人となるに至る。

絶待他力を認むるは眞智なり不可動の佛智なり世の所謂智識なる  
 ものは觀察と實驗と推測に依て成立するものなり恰も彼は暗中を摸  
 索して事物の在所を定め事物の如何なる性質形狀なるやを定めんと

するものに似たらすやよしや住所知れたりとするも性質形狀を認め  
 得られたりとするもこれ唯だ暗中摸索上の智識のみ疑似の間に彷徨  
 し蓋然の域を壓却し能はずと知れ。  
 絶待他力の智は温き胸より胸につたはる直感なり腦中に閃めける  
 天來の靈光なり全身に漲される自然の力なり我にとりては疑はんと  
 欲しても疑ふ能はざるものなり離さんと欲するも離す能はざるもの  
 なり現在我が身に有せる實事なり魚目を借りて寶玉を忘るゝもの  
 らば唯か其愚を笑はざらん有漏相對の假智に彷徨して佛智他力を疑  
 ふものあらば豈之を賢なりと稱するを得んや。  
 絶待他力は智者は智を棄て愚者は愚を棄て善者は善を棄て惡人は  
 惡を棄て男女老少を論せず唯の唯にて如來大心海の人となるべきも  
 のに屬す。



## 第六章 苦樂と他力信仰

快樂が人類唯一の目的なりせば、印度のチャールヅカが云ふ、生命のあらゆる限り安樂愉快を盡せ、汝の朋友より資財を借り來りて美食に飽けとは、直截徹底せる大眞理を道破せるものにあらずや。人は云はん、かくせば、却て快樂は月夜の兎の如く逸脱し去るを如何せん。然り快樂はある制裁規矩の下に存して、放縱无度にやどらざるべし。さり乍ら、若しやどる場合ありとすれば、斯くするは、それが唯一の目的を達するものならずや。快樂果して人類唯一の目的なるか。草木の枝葉は日光に向ひ、人類の所作は皆快樂に向ふ、耕するもの之に向ひ、政治を議するもの之に向ひ、工藝技術に従事するもの之に向ひ、政治を議するもの之を談するもの之に向ふ、されど翻て深思熟考せば、快樂を求むるはこれ苦痛を求むるなり、苦痛なき處快樂なきなり、若し世界に於て求めて得

られざるなく、望んで達せられざるなく、百事己が意のよゝならんか、如何に其生活の无味乾燥不愉快なることぞ、然るに幸なる哉、世に云ふ快樂なるものは、皆苦痛の伴ふあり、小なる快樂には小なる苦痛伴ひ、大なる快樂には大なる苦痛伴ふ、苦痛は快樂をして快樂ならしむるなり、苦痛は人をして快樂を希望せしむるなり、快樂を求むるもの苦痛の存在を祈らざるべからず、快樂を目的とするもの先づ苦痛に感謝せざるべからざるなり、然るに快樂とは、ある一面より云へば苦痛の除却を意味するにあらずや、而して苦痛なければ快樂成立せず、と云ふ、是れ何等の矛盾ぞ撞着ぞ、宗教の目的を以て、拔苦與樂にありと云ふ、我之を取らず、苦を抜き何處に樂ある、苦のみ抜くことを得るものにあらず、樂のみ與ふることを得るものにあらず、『涅槃經』に一話あり、貧福姉妹の二神あり、何處に行くも相離れず、福神の行く處貧神之に従ひ、貧神の趣く處福神之に伴ふ、然るに或家には福神のみを招き之に貧神の伴ふをいぶかる



あり。或家には貧神を逐ふて福神の共に出るを怪むあり。されど此の姉妹の二神決して相離れざるなりと。苦樂二者の關係また實に此の如きものあり。宗教を以て拔苦與樂にありと云ふは、これ第二義方便門にして第一義眞實門にあらず。人生の第一の目的を快樂におくものはあやまれるかな。宗教を以て拔苦與樂のためとなすは達せざるかな。眞人は苦樂以上の天地に生活するものなり。宗教の本旨は不苦不樂涅槃寂靜にあり。

人は迷妄と知りつゝ、苦をさけ樂を求むるものなり。人は意識的に若くは無意識的に、樂の方面を求めて止まざるものなり。求むるが故苦むことを知るも求むることを止むる能はざるものなり。吾人は此苦をさけ樂を求むる意識は如何に我が主張する他力宗教と相關係するかを見んと欲す。

(一) 吾人は嫌惡して止まざる老病死は招かざるも來り、厭ふも離れざ

るものなり。老も苦なり、病も苦なり、死も苦なり。誰か老を喜ぶものぞ、誰れか病を喜ぶものぞ、誰か死を喜ぶものぞ。喜ばざるも來りて我を苦めずば止まざるなり。苦の必然なるを知るも、之をのかれんとするは吾人の感情なり。子養はんと欲するも慈父慈母の待たずして逝く、これ現世のはかなき状態にあらずや。兄妹の愛、ウァルツォルスの如く清く樂きも空く追憶のたねとなる時來り。友情管仲鮑叔の如きも、時無情にも之を奪ひ去る。貴人の華屋にも貧民の蓬家にも、容赦なく入り來るは幾多の天然地變にあらずや。高木となれば嫉妬憎疾の風を受け、雜草となれば強者暴者のためにふまるゝは社會の實際ならずや。有田憂田有宅憂宅牛馬六畜奴婢錢財衣食什物復共憂之。重思累息憂念愁怖。佛說大無量壽經と云ふもの、これ人類世界の真相なり。必然の事實なり。まぬかれ能はざる制約なり。されど如何にもして此苦をさけ此痛を除かんとして、す時も安んぜず、ひたすら之と戦ひ、之を防ぎ、之を滅却せんとするは吾人



日○常○の○状○態○な○り○法○律○の○力○幾○分○が○之○を○防○ぐ○を○謂○る○也○こ○は○一○の○苦○を○他○の○  
 苦○に○か○ゆる○も○の○苦○は○依○然○と○し○て○存○せ○り○道○徳○の○力○幾○分○が○之○を○防○ぐ○を○得○  
 る○也○苦○み○な○が○ら○之○と○争○闘○す○る○も○の○苦○は○依○然○と○し○て○存○せ○り○科○學○哲○學○は○  
 如○何○苦○の○十○方○に○遍○在○す○る○を○證○明○す○る○も○の○法○律○頼○む○に○足○ら○ず○道○徳○頼○む○  
 に○足○ら○ず○學○術○技○藝○頼○む○に○足○ら○ず○と○せ○ば○吾○人○此○處○に○如○何○す○べ○き○や○袖○手○  
 絶○念○苦○の○擒○と○な○り○て○之○に○甘○せん○か○否○々○如○何○に○か○す○け○く○も○呼○吸○の○通○ふ○  
 間○に○ぶ○く○も○脈○管○に○血○の○めぐ○る○間○脱○苦○の○意○識○は○止○め○ん○と○欲○し○て○止○む○  
 能○は○さ○る○も○の○な○り○此○處○に○於○て○か○現○實○以○上○の○宗○教○起○り○來○ら○ざ○る○を○得○ず○  
 宗○教○に○依○て○脱○苦○の○意○識○を○満○足○せ○し○め○ん○と○す○る○な○り○宗○教○は○慥○に○此○脱○苦○  
 の○意○識○を○満○足○せ○し○め○ん○と○す○る○な○り○否○な○慥○に○此○脱○苦○の○意○識○を○満○足○せ○し○  
 む○る○も○の○な○り○古○往○今○來○轉○軻○不○遇○身○を○逆○境○に○苦○し○め○し○人○の○速○に○宗○教○に○  
 入○り○て○其○信○の○堅○固○な○る○は○か○ゝる○理○由○の○存○在○を○以○て○な○り○嗚○呼○苦○は○頼○  
 み○甲○斐○な○き○人○類○以○上○の○あ○る○も○の○自○己○の○運○命○を○さ○い○げ○て○之○に○依○る○べ○き○

あ○る○も○の○即○ち○至○高○至○上○至○力○至○慈○の○大○靈○大○力○を○み○と○め○し○む○語○を○換○へ○て○  
 之○を○言○へ○ば○他○力○の○大○道○は○苦○の○關○門○を○透○し○て○存○せ○り○さ○け○ん○と○欲○し○て○さ○  
 く○る○能○は○さ○る○脱○苦○の○意○識○は○他○力○宗○教○の○天○地○に○導○く○な○り○

(二) 水は低くに流れ人は快樂を求む欲求するが故に快感あるか快感  
 あるが故に欲求するかこれ一の大疑問なり兎に角人の望んで従事す  
 る行爲は快樂の必ず之に随伴するもの思ふに快樂なるものはある活  
 動に附隨して起り来る談話の中に快樂あり運動の中に快樂あり讀書  
 の中に快樂あり勞働に快樂あり悲哀の中に快感あり憤怒の中に快感  
 あり而して快樂は持久のものたらず望んで得れば其快樂既に快樂の  
 性質を大半失却しこれより以上のものを更に求めんとするなり求樂  
 の情は人類一般の通有なり然るに現在に在ては思ふこと一ツかなへ  
 ば二ツ三ツ四ツ五ツ六ツかしの世やてふ歌の如く到底十分満足する  
 能はず此處に於てか求樂の意識は圓滿完全なる安樂境を現實以上に



求めんとす宗教これによりて起るに至る求樂の意識これまた人を宗教の天地に導くものなり一度宗教の天地に入れば苦樂以上の別世界なり苦なきを喜ぶこれ宗教の能事にあらす樂あるを喜ぶ宗教の能事にあらす宗教は苦を苦とせざるなり樂を樂とせざるなり宗教の天地は親慈聖人の所謂佛者則是不可思議光如來土者亦是無量光明土也なるものこれなり道元禪師の鳥の空を飛んで跡なきものこれなり自己を無限の大靈に一任してまた苦樂を顧慮せざるものなり自己の苦樂を顧慮するが如きは未だ他力攝取の自覺なきものなり自己の苦樂棄てざるものなり既に他力攝取の恩寵にあづかれる以上は我身のよからんともあしからんとも思はずことさら苦をのがれんとも樂を求めんとも思はず唯だそれ大慈光明中に起臥し他力大靈の導きの下に行動するのみ嗚呼苦樂より入りて苦樂をはなるものは是れ宗教の別天地ならずや

第七章 他力の啓示到る所にあり

「毛孔に大海を容れ芥子に須彌を納む」とは如何に偉大深遠の宣言なるぞ、毛孔微小なりとは云へ、此處に長へに朽ちざる永遠不朽の真理あり、十方法界を盡せる無際無邊の真理あり、一毛孔に大海を容れ能はざるものは真理の本源に達せざる人なる哉、無限の時間無限の空間に渡れる真理は點爾たる一芥子にあり、芥子に須彌を納むる能はざる人は真理に盲目なる人なるかな、毛孔を小なりとし海洋を大とするものは未だ第一真理を経験せざる人なり、芥子を微なりとし須彌を高とするものは未だ皮相の妄見を脱せざるの人なり、皮相の妄見を脱却して第一真理を経験するや、光明玲瓏たる宗教の天地此處に開け、一毛孔は化して周遍法界の淨土となり、千萬億の佛菩薩の神通遊戯するをみん、一芥子は化して無量光明土となり、三世十方の佛陀薩埵の道法を宣説



するをみん毛孔も佛徳の發現なり大海も佛徳の發現なり芥子も佛徳の發現なり須彌も佛徳の發現なり嗚呼大小高低の妄見を去て佛徳を毛孔に見よ大海に見よ芥子に見よ須彌に見よ

ダーウインは彼尺にも足らざる蚯蚓を研究せんかため二十年の歲月を費せりと云ふにあらずやされと二十年かゝりて蚯蚓に關して如何なる部分まで知りたるぞよしやよし幾百千の鴻儒博學幾百千歳を費して一蚯蚓を研究するも到底之を研究し盡すの時期は到來せざるなり唯に大洋の渺茫としてはてしなきを嘆するを止めよ星辰の遠くして森羅するを嘆するを止めよヒマラヤ山の高く雲に聳るを嘆するを止めよ太平洋の深く底の測り難きを嘆するを止めよ現に微々たる一蚯蚓すら之を知り難きにあらずや嗚呼佛徳の全體はこの一蚯蚓に顯現せり宜なる哉幾千の鴻儒博學遂に之を知り能はざることや

野に咲ける一無名草別にそか馨のすぐるゝものあるにあらずそか

色の殊にたえなるものあるにあらずそか風致の殊に愛すべきものあるにあらず人の一顧たも興ふるものなく日に曝され風雨に打たれ時來りてひとりほゝゑむのみウオヅウォルスは此の無名草に萬斛の同情を表して涙にあまるほどの深大の意義を有すと云はずや唯に色香めてたしと蓄薇をたいゆるを止めよ汚泥に染まざる白蓮のひとり清しと稱するを止めよ旭に匂ふ山樓宇内に冠たりと稱するを止めよ嗚呼此一無名草心ありて之を見れば三千を感動する色あり香あり法界の美をそか覺束なき花そかあはれなる葉にやとせるにあらずや此處にも佛陀の偉徳を認めらるべきにあらずや

聞く釋迦佛王舍城にありし時始め温順にして聰明なりし殃掘摩羅一朝讒に遇ひ其師惡意を以て之に百人斬を強ゆ殃掘摩羅心甚だ懊惱せしも師命辭するに由なく十字街上に奔り劔を抜て人を切り始むるや心狂亂して人を見れば親となく疎となく老となく幼となく血を見



ざれば止まざらんとす。其母正午になれども殃掘摩羅の歸來せざるを  
 み、その餓に苦まむを恐れ、食を持して師家に越く途中、殃掘摩羅既に九  
 十九人を殺して百に一を缺く、即ち母の來るをみ、山より高き慈恩を忘  
 れ走て之を斬殺せんとす、折ふし釋迦佛托鉢に出で、此状態を眺め、急  
 に殃掘摩羅に近く、殃掘摩羅即ち母を棄て、釋迦佛に向ふ、佛此處に於  
 て法を説て狂へる心を和け、導いて其弟子とならしむ。百人斬の殃掘摩  
 羅、如何に迷亂せりとは云へ、如何に錯狂せりとは云へ、無罪の一人をこ  
 ろす、これ既に重罪なるに、九十九人を殺せる上、更に慈愛の母を殺し、三  
 界獨尊の佛陀を殺さんどす、これ何たるとそや。若し之を法律上より觀  
 察し、道德上より觀察せば、極惡深重救ふべからざるの人非人。されと靜  
 に考一考せよ。殃掘摩羅かれ無謀の師の強命に遇ひ心狂亂して九十九  
 人を殺すもの、これ境遇の然らしむる所なり、業報の然らしむる所なり、  
 殃掘摩羅は寧ろ憫むべくして惡むべきにあらざるなり。若し大悟徹底

の人より之をみんか、實相無相此處に善なく此處に惡なく、一理流行因  
 果相續、雲流れ水走ると何の問ふ所なきなり、唯に法界莊嚴の波紋を見  
 んのみなり、殃掘摩羅其人に就て、又偉大なる佛徳を認め得べきにあら  
 ずや。

セルバンテスの『ドンキホーテ』を見よ、前後の思慮なき武士氣質の一  
 愚直漢、其諸國を巡回して風車を惡魔と誤認して、之と戟を交る如き、多  
 くの滑稽と失敗とを演じたるなり、されど深く之を考ふれば、其思慮な  
 き行動、皆絶對不可思議の發現なり、如來の活動なり、一の誹るべきもの  
 なく、一の笑ふべきものなし、これ玲瓏なり、これ光明なり、これ大智なり  
 と大賢なりと知らずや。

彼の親にも忌まれ兄弟にだも忌まるゝ癩病患者を見よ、毛髪は抜け  
 目鼻は落つ、皮膚腐敗して臭氣近くべからず、そが身體の苦痛そが精神  
 の煩悶如何ばかりぞ、世人は果して之を厭ふか、之を惜むか、鼻を掩ふて



疾走するが厭ふものは厭ふ、憎むものは憎めよ、疾走するものは疾走せよ、されど知らずや、靡亂せる目鼻に光明あり、大能あり、腐敗せる臭肉に、如來の活動あり、不思議の靈力あることを。

高きこと星の如きより深きこと海底に至るまで、大なること太陽の如きより小なること原子の如きに至るまで、永遠の過去より永遠の將來に至るまで、實在せるものは因果の活動なり、一理流行なり、生は生なり、我に於て何かあらん、老は老なり、我に於て何かあらん、病は病なり、我に於て何かあらん、死は死なり、我に於て何かあらん、洪水は洪水なり、我に於て何かあらん、地震は地震なり、我に於て何かあらん、自我の妄情を棄てよ、利己の妄念を脱せよ、天地の大化に自己を没却せよ、因果の大道に自己を没却せよ、絶對不可思議に自己を没却せよ、如來の慈胸に自己を没却せよ、此天地には無智なきなり、無智其まゝにして、大智なり、罪惡なきなり、罪惡其まゝにして、大善徳なり、癩病なきなり、癩病其まゝにして、

て健全なるなり、死なきなり、死其まゝにして、生なり、老なきなり、老其まゝにして、壯なり、病む人は病む、自然のまゝ、光明ある、平安あり、憾みなく、悲なし、愚者は愚なるまゝ、光明あり、平安あり、憾なく、悲なし、賢者は賢なるまゝ、光明あり、平安あり、憾なく、悲なし、賢者徳者富者強者は賢なるまゝ、徳なるまゝ、富めるまゝ、強きまゝ、光明あり、平安あり、憾なく、悲なし、此の平等の大慈悲大能は法律と衝突せずして、法律以上あり、道徳と衝突せずして、道徳以上あり、あらゆる人為的制裁と衝突せずして、人為的制裁以上あり、是誠に法律道徳智識の如きは小計度分別小安排措置の力到底なす能はざる企て及ばざる靈能靈力なり、他力自然を以て一面は慈悲なれども、一面は不慈悲なりと云ふは未だ真に他力自然を知らざるものなり、一面は光明なれども、一面は暗黒なりと云ふは未だ他力自然を知らざるものなり、一面は美なりと雖、一面は醜なりと云ふは未だ他力自然を知らざるものなり、嗚呼閉たる眼を開けよ、此



處に浩漭三千に溢るゝ大光明のかゝやけるをみとめんかぎりなき大  
智大慈大能の働けるをみとめん。

「ウパニシヤット」の所謂其は汝なり〔tat tvamasi〕と云ふもの亦余は梵なり  
〔Aham-brahmasmi〕と云ふものまさに此妙趣を示すものならずや真宗の  
所謂タノム機とタノマル法と二なしと云ふもの二字即四字なりと  
云ふものはまさに此妙趣を示すものならずや唯だそれ體驗せよ信證  
せよ口能く之を言ふ能はざるも筆能く之を述ぶる能はざるも且洞然  
として神會默照する所あらんかな。

## 第八章 他方信仰の經過

人間てふものゝそが一生涯の思想の變化に就て過ぎし脈路を回顧  
する時は、縦横に錯雜變化せること、恰も蜘蛛の巢の如からん、これ處世  
上の思想に就ても、倫理上の思想に就ても、宗教上の思想に就ても、皆斯  
くの如し、而して今茲に宗教上の思想變化に就て一考せしめよ。

吾人の師親鸞聖人は、三願轉入を説かれたり、これ實に妙味ある言葉  
にして、人間宗教心の次第に淳熟する經過を示されたる者なり、登山に  
於ても麓より漸次頂上に達せざるべからず、河を越すにも此岸より漸  
次彼岸に達せざるべからず、決して一飛にして麓より頂上に達し、此岸  
より彼岸に至るものにあらず、宗教上の信仰も亦之と同じくして、漸次  
種々の過程を経て、初めて圓熟の境に進むものにして、決して過程を経  
ずして、其妙所に到達するものにあらず、宗教的天才と稱せらる



る人は、一躍宗教の妙處に合體せるが如しと雖、これ亦其經過なしと云ふにあらすして其の極めて迅速なるが故なり。

而して三願轉入と云ふは、『佛說大无量壽經』の中に、无量壽佛の因位果上の種々の事實を説かれたるが、其因位の時に於て四十八の本願と誓ひられたり。其中吾人が佛になることを誓はれたる願三あり、即ち十八願、十九願、二十願、是なり、此三願に就て親鸞上人の觀察實に次の如し。

十八願 — 純他力

十九願 — 純自力

二十願 — 半自力半他力

是我々衆生の機類、千差萬別なりと雖、之を大判すれば、即三種となる。が故に、之に應せんが爲め、三願を誓約せられたりと云ふ。然して十九願の機が一轉して二十願に入り、二十願の機が一轉して、究竟至極の十八願に入るなり。之を三願轉入と云ふ。之を自身の上に引用し、又幾多の人

に就て考へ來らば、三願轉入は實に動すべからざる一大事實にあらずや。吾人初志を立るや、瞳々として旭日の昇るが如く、洪水の決するが如く、奮然として云はん、善とは何ぞ、菩提とは何ぞ、釋迦彼れ何人ぞ、基督彼れ何人ぞ、龍樹、天親、何者ぞ、天台、賢首、何者ぞ、親鸞、日蓮、何者ぞ、彼も人なり、我も人なり、いでや法界の大眞理をみとめ、我自ら我安立の地をみとめんのみと、是れ所謂十九願純自力の時代なり。されど一善を積む下より一惡起り、高慢の惡なることを聞きて謙遜する心中に却て其謙遜を自負するが如く、殘酷の惡なるを聞き布施を行ふ其時却て其布施を自慢するが如く、かゝる淺ましき我心が分り來らんには、以て如何となすか。一粒の砂一滴の水も、學べば學ぶほど考ふれば考ふる程、分別し能はざる人間智識の薄弱なるに於てをや、何ぞ我自ら法界の眞理をみとめて我安立の地となさんと云ふ、純自力心は一轉せざるを得んや。此處に於てか、心機一轉かく考へざるべからず、自力を以て分別し得る部分と分



別し能はざる部分との存することを又自力を以て成功し得るものと成功し能はざるものとの存することをされば我知り得る範囲内に心を安じ我爲し能ふ善を積まんのみそれ以上の善は自然に委託するより他なしと嗚呼これ儘に半自力他力の二十願の時代ならずやされど翻て考一考せば果して如何其分別し得る部分と云ふは果して完全なるが其積みたる善と云ふもの果して真正の善なるかよまたかゝるもの果して風にも雨にも涙にも動かぬ安心が得らるか否かかゝること決して金剛堅固の安立を得らるゝものにあらず霞を隔て山を見るが如き智識飯中砂を混じたるが如き善根何ぞ満足の安心を成し得るものぞ思一度此處に至らば又また心機一轉せざるべからず此處に至て十八願純他力の時代に到達せざるべからず不動不亂金剛不壞の安心は自己の力に求めて得らざるべきものにあらず自己の智識に求めて得らるべきものにあらず自己の感情に求めて得らるべきものにあらず

す自己の意志に求めて得らるべきものにあらず自己の作善修行に求めて得らるべきものにあらず自己の死生も苦樂も其他一切の起居動作も一切の運命法界の眞理宇宙の大法王盡十方無礙光如來に乗托するに依て初て大安心を得るなり不動地を得るなり此境界に達すれば花の意なくして散り水の意なくして流れ山自ら高く谿自ら低く天真爛熳俯仰自在富貴に處して富貴に宜く貧賤に處して貧賤に宜く政界にありて政界に宜く文界にありて文界に宜く執著なく我情なく慰樂あり感謝あり安心あり時に煩惱の雲起ることあり私慾の霧ふさがることありされど煩惱私慾の下よりも大悲の光明をみとめ歡喜感謝の情起るを禁すること能はざるなり

宗教意識の發展には斯くの如く三種の階級あり而して此の三階級の人に宗祖親鸞聖人は左の名稱を附せられたり

十八願の機類——正定聚



十九願の機類——邪定聚  
二十願の機類——不定聚

邪定聚と云ふは、純自力にして到底安心を得られざるが故なり、半自力半他力を不定聚と云ふは、蓋し名言にあらずや、純他力に至て始て信仰確立の正定聚に到達するなり、斯くの如く考へ來らば、佛の本願は豈に法界の大真理の呼聲にあらずや。

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字列が並ぶ）

### 第九章 他力の大願

大願とは何ぞや、我等が絶対依憑の如來の大意志これなり、芙蓉の雨露溪に下り野を流れ、遂に洋々海に注ぐもの、これ豈に水の意志に非ずや、百丈の積薪點火一抔、忽にして烟り忽にし燃え、紅炎烈焼化して白灰となすもの、これ豈に火の意志にあらずや、水火の非情猶ほ此の如きの意志あり、我等の如來などが洪遠深微の大意志なからんや、梅花薫して氣漸く和なり、幽谷を出て、村に町に春信を傳ふるもの、これ黃鸝の意志ならずや、怪きを見て、猿々吹ゆるもの、これ家犬の意志ならずや、鳥獸の無智猶ほ此の如きの意志あり、我等の如來などが甚深幽邃の大意志なからんや、見よ、事小なれば意志また小なり、事大なれば意志また大なり、十方衆生を攝取して棄てすと云ふ、我如來其意志編十方なりと知らずや、永却の救濟者たる我如來其意志貫三世なりと知らずや、嗚呼、彼の



意志は大なること、虚空の如き智慧よりあらはれたるなり、深きこと、大海の如き慈悲よりあらはれたるなり、されば我如来の意志を稱して大智願と云ひ大悲願と云ふ本願と云ひ大願と云ふ時は、遂として遠く世は洪としてひろしされと未だ嘗て我如来の大願の如き遠且つ大なるものはあらざるなり、嗚呼如来の大願にあひし我等は幸福なるかな、佛説大無量壽經の記述者は、如来の大願を列擧して四十八となせり、されど異譯の四經に對照せんか、漢吳二譯は二十四願なり、漢譯は魏譯と同く四十八願あり、宋譯は三十六願なり、現存の梵本には四十六願ありと云ふ、思ふに如来の大願は、經典記載の有無にかゝはらず、必然存在せざるべからざる救濟者の意志なり、如来の救濟を感ずるもの必ずや經典の有無にかゝはらず、本願の具缺に依らず、明了適切に如来の大意を默會するを得ん、吾人は此意義に於て經典以外に大願の儼として目前に存在し玉ふことを疑はざるなり、されば今此處に本願具缺比較の煩

をさけ直に如来の意匠の何物なるやを伺はん、之を伺ふには先づ自己胸底にひそめる信仰的實感に訴へよ、如来は如何なる方法にして衆生を救濟せんの大願なるかと、眼を閉ちて默想せよ、本願我方寸に入り、明鏡を執て自己の面貌を見る如く、それく分明に觀するを得べけん、斯くて經典に記載せる四十八願をみよ、内覺の大願文字をかりて外に顯覺せるをみんかな、一の本願皆悉く生命と活動にみてるをみんかな。

古來我が如来の大願を簡單明了に概括して云へるあり、四法三願二回向四願六法五願眞實六願眞假八願と四法三願とは何ぞや、他力の教行信證之を四法と云ひ、十一必至滅度の願、十七諸佛稱名の願、十八至信心樂の願之を三願と云ふ、我等は大聖の遺經により、如来救濟の大行、現に十方に活動しつゝあるを知り、小我執著の妄情を一擲し、如来の慈悲に全心を委ね、如来の力によりて大安の證果を得、これ豈我等獲信安住



の経過ならずや、されど此の如き経過によりて此の如き安住を得る。これ我等の力にあらず、如來十七願によりて世界に聖賢偉人を下して他力の大道を宣布し十八願により至心信樂己を忘れて佛心に入らしめ、十一願により大安の證果を得せしむ、今日教行信證の現存するもの、これ如來の十一十七十八の三願あるによりてならずや、二回向四願とは何ぞや、往相還相之を二回向と云ひ、十一十七十八の三願に加ふるに、十二還相回向の願を以てし之を四願と云ふ、我等厭ふべき迷界を捨て脱然として光明大安の世界に入る、これ往相回向なり、既に光明大安の世界に入り終て、願みで世界の同胞をみる、皆これ苦より苦に入り闇より闇に入る、勃然大慈悲起て止む能はず、還て利他の業に従ふ、これ還相回向なり、我等暗黒の世界より一轉して光明世界に至り光明世界より再び暗黒界に還り、衆生を導く者これ我等の力にあらず、光明世界に入るは如來十一十七十七三願の力なり、再び暗黒世界に還り衆生を教化

する、これ如來十二還相回向の力なり、往相還相これ如來願力の然らしむる所ならずや、何をか六法五願と云ふや、教行信證直佛眞土之を六法と云ひ、十一十七十八の三願に加ふるに、十二光明無量の願十三壽命無量の願を以て之を五願と云ふ、我等大安の證果たる永遠の生命を得、遍一切處の光明を具するもの、これ我等の力ならんや、實に如來十三光善二無量願の力ならずや、何をか眞實六願と云ふ、十一十二十三十七十八二十二の本願之を稱して眞實六願と云ふ、見よ我等十七願の力により大聖偉人宣傳の他力大道をき、十八願の力により佛の慈悲心に依憑信賴し、十一願の力により光明大安の世界に入り、十二十三の願力により無限の光明を具足し、永遠の生命を得るにあらずや、何をか眞假八願と云ふ、前の眞實六願に加ふるに、十九至心發願の願、二十至心回向の願を以てせるもの、之を眞假八願と云ふ、機縁純熟の人、宗教的資性の人、迂遠の過程によらず、直に絕待他力の大道に入り得べけんも、ま



た直ちに此處に入り能はざる人のため誘引向上の一路を要す自力満腹の人に對ては絶待信頼をすゝむるも水上の書字徒に無効に歸せんかゝる對機には先づ自力修善をすゝむるの必要ありこれ十九願のなからざるを得ざる所以なり半自力半他力の人絶待依憑の必要をみとむれども自力に依て依憑信頼せんとなす彼のため二十願なからざるを得ざるなり段一段進一進純自力より一轉して半自力半他力に至り更に一轉して純他力の眞實六願中の人たるに至る假をして眞に入らしめんがため此處に眞假八願の存するならずや四十八願其數多しと雖以上の分類により略々我が如來大願の如何なるものなるやを悟了するを得ん。

千斤の重量も其力中央の一點にあつまる四十八願其數多く其分類さはなりと雖其が中心の一點十八王本願の至心信樂の一點にあり若し此一點を把住せんか四十八願該羅して把住するものなり至心信樂

とは何ぞや己の心を捨てゝ如來の心に同化融合するにあり佛心とは大慈悲心なりその大慈悲心に同化融合するものなり試に思へ正義は冷酷なり器械的なり正義は決して我等の第一原理ならざるなり勇氣は盲目なり無意味なり勇氣は決して我等の第一原理ならざるなり禮儀は煩瑣なり器械的なり禮儀は決して我等の第一原理ならざるなり其他戒と云ひ忍辱と云ひ皆冥想と云ひ皆必要なりと雖これらのもの皆我等の第一原理たらざるなり我等の第一原理は唯だ如來の大慈悲心にありこの大慈悲心にのみよりて大安を得この大慈悲心により正義も新生命を得るなり勇氣も新生命を得るなり冥想も新生命を得るなり禮儀も新生命を得るなり如來大願の中心は慈悲にあり慈悲の此中心を把住する他の手段方法を要せず唯だそれ信仰的實感に訴ふるにあるのみ。

我等既に如來の大願を見たり若し如來の大願を見ざらんか永劫迷



界を脱却するの機なけん請ふ親鸞聖人の語るをきけ。衆生佛願の生起本末を聞て疑心あることなき是を聞と云ふなり『教行信證』

信心と言ふは則ち本願力廻向の信心なり(同)

煩惱具足と信知して本願力に乗すれば即ち穢身すてはて、法性常樂證せしむ『高僧和讃』

嗚呼偉大なるかな如來の大願や深廣なるかな如來の大願や我等の信心は如來大願の賜物なり我等の證果は如來大願の賜物なり如來の本願に依て此處に永遠の生命あり此處に無碍の光明あり如來の大願を認めざるものは一闡提の徒のみ經典以外に如來の本願を知らざるものは骨蒸的宗教者のみ目前に靈動せる如來の大願をみとむるものは如來の心光に攝取せられたる人なりと知らずや

## 第十章 他力の三信

富士山上に到達せんとするや御殿場の方面より進行すると甲斐の方面より進行するとの二路あり其路の同じからざるのみならず風景の眺めまた大にひとしからざるものありされど海拔一千二百丈屹として雲を凌げる頂點に達すれば甲路より進めるものと乙路より進めるものも共に同一の地位に達し天空海闊の同一の眺望を樂む吾人は絶待他力の大道に安住せんとするや或は倫理より轉入するあり或は智識より轉入するあり或は苦樂の感情より入るあり或は自然因果の啓示より入るありそが過程一ならざると同く其趣味また等しからざるなりされどひとしく絶待他力の大道に到達せんかそが過程行路の差異あるに關せず共に限りなき歡喜と平和と感謝に溢るゝなり共にひとしく法味樂を受くるなり共に利他教化の大悲心起り來て衆生濟



度に從ふなり。乞ふ是より絶待他力安心の趣味を説かんかな。

そも絶待他力の大道に安住すとは何事ぞや。消ては起こり起ては消る。淀に浮ぶ泡沫の如きものこれ我等が心の状態にあらずや。暗黒の中に途を失ひ左右に行き迷ふものこれ我等が日常状態にあらずや。秋雨の降りしきる如く冬風の吹きすさむ如く煩惱に間斷なきものこれ我等が状態にあらずや。かゝる生滅常ならざる、暗黒にして導なき煩惱の荒れくるふ我心中に於て、微塵も虚偽なき至誠を以て如來の我を救済し給ふことを信じて、前途に大光明をみとめ、其狀狂波怒濤の中に巖として動かす、高く燦然として暗黒の夜を照す燈明臺の如きもの、これ絶待他力に安住せる人なりと知らずや。佛説大无量壽經を見よ。絶待他力の大道に安住せる人に三信あるを示さる。三信とは至心と信樂と欲生。これなり。至心とは一點だも偽りなき、眞實至誠の心なり。信樂とは无限大悲の佛陀に絶待依憑の信なり。欲生とは汚濁煩惱の穢土を厭離して、

清淨光明の樂土を願ふの心なり。至心信樂の人は既に佛陀の救済にあつかれる人なり。動きなき地盤に立てる人なり。横に五趣八難を脱して輪廻を超絶せる人なり。此人にして猶ほ欲生心ありと云ふ一見解すべからざるものあるに似たり。されど考一考せよ。燈臺如何に固く如何に光ありと雖、外界の風はずさみ波はよせくること間斷なきを、信如何に固くとも濁惡の風ずさみ煩惱の波よせくることを、されば自己方寸にやどれる光は煩惱の中にあらはれたる光なり。濁惡の中にあらはれたる光なり。自己は本來无智なり。罪惡なり。此光何處より來れる。これ如來います所より來れる光なり。彼岸より來れる光なり。如來います所の彼岸は、此處に貪欲なく、瞋恚なく、愚癡なく、怨恨なく、嫉妬なく、不平なく、歡喜あり、平和あり、慈愛ある。圓滿清淨の无量光明土なり。至心信樂の人、方寸の光をたよりにして常に无量光明土を憧憬する亦宜ならずや。欲生心ありと云ふもの、また此所以ならずや。至心と信樂と欲生これ三に



して一なり、一にして三なり。至心は信樂の至心なるなり、欲生は信樂の發動せるなり、されば親鸞聖人云へらく。

信に知ぬ至心信樂欲生其言異なりと雖、其意惟れ一なり、何を以ての故三心既に疑蓋難るなきが故、眞實の一心之を金剛眞心と名く、金剛の眞心是を眞實信心と名く、『教行信證』。

そも此處に大に味ふべきものあり、何ぞや、无心の稚兒其母を見て喜び愛するは何故ぞ、これ其子に對する母の愛の反射なり、子の愛は母の愛なり、嗚呼此三信なるもの、罪惡凡夫の吾人之を起すにあらすして、如來他力の三心吾人の方對にやどれるなり、如來に絶待依憑するの心、これ自己の發起する所にあらすして、如來我をして、絶待依憑せしめ給ふなり、古歌に云はすや。

たのませせてたのまれ給ふ彌陀なれば、  
たのむこゝろも我とおこさす。

親鸞聖人は他力の旨趣より此三心を論斷すらく、先づ至心に就て、斯心は則ちこれ不可思議不可稱不可說一乘大智願海回向利益他の眞實心なり、是を至心と名くと云はれ、信樂と言ふは、則ちこれ如來満足大慈圓融無碍の信心悔なり、是故疑蓋間雜あることなし、故に信樂と名くと云はれ、欲生と云ふは、則ち是れ如來諸有の群生を招喚するの救命なり、と云へり、見よ至心も信樂も欲生もみな如來に屬することを、至心は如來の眞實心なり、信樂は如來の智慧心なり、欲生は如來の慈悲心なり、この如來の眞實心智慧心慈悲心衆生の方寸にやとりて衆生に自覺せらるゝとき、此處に衆生の三信となる、嗚呼此の三信や、如來にありては三信互融衆生に在ては三信皈一の信樂となる、信樂は如來の智慧なり、光明の自覺なり、凡夫有滿の智慧分別に依て得らるべきものならず、有限相待の實驗の到達し得べきものならず、月を認めしむるものは月の光なり、英雄を知るものは英雄なり、如來を認むるものは如來の智慧なり。



絶對に依憑するものは絶對の力なり、如來の智慧絶對の力我に來りて我をして如來を認めしめ、我をして絶對に依憑せしめ玉ふ、これ信樂なりと知らすや。

有限の眞實は有限なるへし、有限の眞實は不動の眞實に非ざるなり、頼むへき眞實に非ざるなり、眞正の眞實と云ふ能はざるなり、有限の信樂は有限なるへし、有限の信樂は不動の信樂にあらざるなり、不變の信樂にあらざるなり、たよるへき信樂に非さりなり、眞正の信樂に非ざるなり、有限の欲生は有限なるへし、有限欲生は、不動の欲生にあらざるなり、不變の欲生に非ざるなり、たよるへき欲生にあらざるなり、三信若し有限の凡夫之を起すものなりせば、有漏相對の衆生之を起すものなりせば、三信共に有限なるへし、有漏なるべし、變化すへし、たよるへからざるなり、然るに三信これ有限相對有漏雜染の凡夫之を發起するにあらずして、至心は如來絶對無限の至心なり、信樂は如來絶對無限の智慧なり

欲生は如來絶對無限の慈悲なり、如來絶對無限の眞實智慧慈悲之を我方寸に得たり、雨降らは降れ風吹かは吹け、山岳壞れは壞れよ、河海漲らは漲れよ、憂愁苦惱疾病生死離合集散、以て此三信を動すに足らず、變ずるに足らず、此三信は絶對なり、無限なり、不變なり、子の親に分れたるときも、親の子に分れたるときも、火災風災水災に遇ふときも、誹謗に遇ふ時も、侮辱に遇ふときも、限りなき歡喜あり、限りなき平安あり、限りなき感謝あり、限りなき光明と指導の下にあり、これ絶對依憑の心狀なり、他力安住の状態なることを知れ。

如來の三信はこれ衆生の三信、衆生の三信はこれ如來の三信、如來と衆生と二にして不二、不二にして二、南無の二字に阿彌陀佛の四字あり、阿彌陀佛の四字に南無の二字あり、二字即四字、四字即二字、世の信仰變遷を稱ふるものは、衆生三信の皮相を見て如來三信の眞實を見ざるものなり、信仰の對象に人格(靈格)と同意義に於てなしと云ふもの、南無



の二字を知て生ける阿彌陀佛の四字を知らざるものなり。若し衆生の三信は如來絶待無限の三信なることを知られば、何處にか變遷進退をみとめん。嗚呼これこの衆生の三信眞實智慧慈悲、これ單なる盲目的活動にあらざるなり、これ單なる空虚なる形式理法にあらざるなり、これこの三信盲目的活動にもあらず形式理法にもあらずして、限りなき智慧なり、限りなき慈悲なり、限りなき靈の力なり、この限りなき智慧慈悲大能を有する如來豈に盲目的活動ならんや、空虚なる形式理法ならんや、言語道斷心行所滅強て名けて人格と云ひ靈格と云ふ。此の靈格のまします所豈に有漏雜染の世界ならんや、有限溷濁の穢土ならんや、無量光明土なり、極樂無爲涅槃界なり。之を要すに他力信仰は如來眞實智慧慈悲の活動と云ふべきなり。如來の活動衆生に動きて三信となり、此處に絶待依憑の大安となる。如來の力によりて如來をみとめたる。これ他力信仰の成立なり。

## 第十一章 他力の名號

善財童子佛命を受けて郊野に藥草を搜る。滿目の青草皆なこれ藥草たらざるはなかりきと、我等如何にして佛を認識せんかを憂ふる勿れ、如何にして救濟せらるべきやに苦しむ勿れ、若し夫れ絶對他力の信仰に安住せんか、十方至る所に佛陀を認め、四維くまなく救濟の活動を見るを得べきなり、乞ふ少しく之を述べしめよ。

吾人は救濟を求めずして存生し能はざるものなり、平和幸福を求めずして生存し能はざるものなり、光明世界を求めずして生存し能はざるものなり、是れ我等心内の事實人類の本性、棄てんと欲して棄つる能はず、忘れんと欲して忘るゝ能はず、若し假りに此事實を我等人類の本性より除き去らんか、希望なく進歩なく發達なく、光明なく、墮落腐敗支離滅裂、其極人類の滅亡あるのみ、三界は火宅と知りつゝも猶ほ生存し



得る所以のもの、救済平安光明の希望前途に豫想し得らるゝを以て故ならずや、弱肉強食の修羅界と知りつゝも猶ほ生存し得る所以のもの、中心何處にか救済平安光明の希望あるを以ての故ならずや、此希望をして完全圓滿に實現せしめ満足せしむるもの絶待他力の信仰によらずして何處にか求むべき、絶對他力の信仰によらんか、萬有は救済の顯現なり、榮枯生滅變々化々皆なこれ救済的活動なり、火宅を變じて清凉池となすものなり、修羅界を變じて百福莊嚴の淨土となすものなり、我は救済の三形式に顯現するをみる。

一、我は如來の中にあり(六字名號を法に約するもの行卷の所説)

一、我の中に如來あり(六字名號を機に約するもの玄微分の所説)

一、如來は我を救済し給ふ(六字名號機法に約するもの御文一ノ十五通二ノ十五通二十通四ノ八通十四通等)

我は如來の中にあり、我をして慈悲の生命の如來を認めしめたるは如來なり、一切時一切處に於て我に大安慰を與へつゝあるは如來なり、

罪惡の煩悶になやむとき、如來の慈懷にあるを思ふて安く、浮世の風波にくるしむるとき、如來の手に導かるゝによりて力つよし、これ絶對依憑の信仰ならずや、他力信賴の状態ならずや、大船に乗じて長江を下る、草綠にして花燃え、鳥啼て境靜かに、兩岸の風物我を迎ふ、我豈に大船に感謝なからむや、疾風吹きすすんで怒濤星を洗ふとき、我大船にあるを思ふて力つよからずや、晴雨につけ順逆につけ、船は我の生命なり、我の安穩所なり、嗚呼、如來は我等の大船なり、我は如來の中にあり、如來は我を守り、我を導き、理想の彼岸に進みつゝあり、龍樹『易行品』の「陸道の歩行は則ち苦しく、水道の乗船は則ち樂し」と云ひ、師親鸞の「煩惱具足と信知して本願力に乗すれば」と云ふもの、まさに此間の消息を漏すものならずや、これ一。

我の中に如來あり、我貪瞋さかまく胸中に如來の聲あり、我が十聲稱佛に十願十行あり、我を離れて宇宙無一物なり、我を離れて萬物無意義



ばり法蔵米切の修行我を離れて何の爲ぞ無邊不斷の光明我を照らす  
 して何のためぞ世々の善智識我を導くにあらずして何のためぞ花我  
 が爲めにあり月我が爲にあり山我が爲にあり海我が爲にあり友と雲  
 烟萬里の遠征にのぼる途中我れ疲勞して青草にねひる友あまたたひ  
 呼べども醒めず止むを得ずして如意寶珠を我衣裏に藏して去る我れ  
 さめて孤獨身に一物なく食を村邑に乞ふて此處彼處と彷徨するのみ  
 一日友と偶然邂逅すれば我衣裏の如意寶珠を示す我れ此處に於て求  
 めて得られざるなく望んで達せられざるなき無上寶珠を有するを知  
 れり此の小話教る所決して小ならず我れ決して單獨孤立ならず貧  
 窮困乏ならず我は佛陀薩垂を有せり我は宇宙萬有を有せり我何の爲  
 めに苦しみ何の爲めに悶へんやこれ二  
 如來の中に我をみつゝるものは唯だ如來あるのみ我の中に如來を  
 みとむるものは唯だ我あるのみ唯だこれ實感なり心證なり取捨の要

なきなり罪惡の凡夫衆苦充滿の穢土にありて慈悲矜哀の佛陀を彼岸  
 に望み依憑信賴してそが救済を仰ぐ娑婆の風波荒しと雖慈悲の冥助  
 あり現世の果報つたなしと雖永久の榮光は未來にあり我は無力なり  
 罪惡なり無智なり三界沈倫の衆生なり佛陀は慈悲なり智慧なり永遠  
 の生命なり淨界の覺者なり無力無智罪惡沈倫の我は慈悲智慧の佛陀  
 の救済により稚兒の慈母の懷裡に平安を得るの觀喜感謝ありこれ如  
 來我を救済し玉ふと感ずるものなりこれ三

南無阿彌陀佛の文字名號は救済の意義を顯示せるものなり宗乘學  
 者は之を論じて法に約すと云ひ機に約すと云ひ機法の二に約すと云  
 ふ然かも乾燥枯談の談理砂をかむが如し我は之を心證實感の上を求  
 めて如上の説を得たり我は如來の一に救済をみつゝるを得我の一に  
 救済をみつゝるを得如來と我との二者の間に救済をみつゝるを得た



人或は疑はん救済の如來なるもの唯に是れ主觀の產物にして客觀上何等の根據あるものにあらずらんと是れ宗教的經驗なき人の皆言ふ所なり我信する所によれば救済の如來は主觀に於て事實なると共に客觀に於て事實なり花の開落啓示あり指導あり潮の干満啓示あり指導あり一切のもの皆是れ如來の大能をたへ如來の慈懷に安住すべきを示すにあらずや宗教的經驗なき人は唯に花の開落を見るのみ潮の干満を見るのみ山を見るのみ川を見るのみ鳥を見るのみ獸を見るのみ而して如來を見ざるなり宗教的經驗なき人の見る所是にして宗教的經驗の見る所非なるか色盲者の所見事實にして非色盲者の所見事實にあらずるか非音樂者の樂聲を聞てますしと云ふは事實にして音樂者の樂聲をうるはしと云ふは事實にあらずるが如來を見る能はずと云ふ人は色盲者の色を見ざるのみ非音樂者の樂聲をますしと云ふ類のみ

此の如く觀察し來れば六字名號は救済の事實なり事實をあらはせる御名なり古來四字名號六字名號の論議あり四字名號を主張する人は云ふ南無は行者の歸命にして阿彌陀佛は佛名なりと六字名號を主張する人は云ふ南無阿彌陀佛是れ佛名なりと誠に原語に溯て之を見れば *Namo = amityay Use Buddha* (歸命無量壽佛) 若くは *Namo = amitayha Buddha* (歸命無量光佛) にして四字にもあらず六字にもあらず唯だ原音を漢字に寫せるときにのみ四字六字の論議あるべしされど此四字六字の論議は暫く措き *Namo* 即ち歸命は佛名に屬すべきや否や若し普通の見解に隨へば南無釋迦牟尼佛と云ふと同く南無觀世音菩薩と云ふと同く南無は行者の歸命にして佛名にあらずるなり然らば即ち我救済の如來の御名は南無阿彌陀佛なるべきなり歸命せしむる阿彌陀佛なるべきなり救済の事實をあらはす御名なるべきなり

如來の御名をよぶは感謝を表するなり師親鸞九十歳にして此世を



故●に●來●て●如●來●の●名●號●を●讚●美●せ●ざ●る●ぞ●  
 人●は●惱●み●な●き●人●な●る●哉●其●人●は●感●謝●と●懺●悔●の●人●な●れ●ば●な●り●鳴●呼●卿●等●何●  
 は●幸●な●る●哉●其●人●は●如●來●に●救●濟●せ●ら●れ●た●る●人●な●れ●ば●な●り●名●號●を●知●れ●る●  
 名●號●を●知●り●ぬ●感●謝●懺●悔●の●表●徴●と●し●て●の●名●號●を●知●り●ぬ●名●號●を●知●れ●る●人●

辭●せ●ん●と●す●る●や●シ●カ●シ●テ●ヨ●リ●コ●ノ●カ●タ●ロ●ニ●世●事●ヲ●マ●シ●ユ●ス●タ●ク●佛●恩●  
 ノ●厚●キ●コ●ト●ヲ●ノ●フ●聲●ニ●余●言●フ●ア●ラ●ハ●サ●ス●モ●ハ●ラ●聲●名●タ●ユ●ル●コ●ト●ナ●シ●  
 〔御傳鈔〕とあるは感謝の至極をあらはすものならずや如来の御名を呼  
 ぶは懺悔を表するなり我等過失を自覺するとき天を呼ばず地を呼ば  
 す人を呼ばず如来の御名を呼んで懺悔を表するなり師善導云く念々  
 稱名して常に懺悔す〔般舟讚〕と如来の御名を呼ぶとき勇氣あり我れ御  
 名をふ稱れば暗黒の森林を過ぐるに恐れなきなり我れ御名を稱ふれ  
 ば罵言誹謗に恐れざるなり我れ御名を稱ふれば怒濤の船にあるを恐  
 れざるなり我れ御名を稱ふれば貧賤を恐れざるなり如来の御名を呼  
 ぶとき佛のころに來るなり我れ佛命を稱ふれば怒和らくなり我れ佛  
 名を稱ふれば嫉妬の炎消え去るなり我れ佛命を稱ふれば妄念形をか  
 くすなり稱名の功德偉ならずや大ならずや  
 我●は●救●濟●の●事●實●と●し●て●の●名●號●を●知●り●ぬ●佛●名●と●し●て●機●法●併●へ●有●せ●る●



## 第十二章 他力の行信

救済は「信」によるか「行」によるかとは、古來宗教史上長く連結して解けざる一大問題たり。其狀倫理學上善とは「動機」に名けたるか「結果」に名けたるか。論争甲論乙駁燦然として偉彩を史上に止めしに似たらずや我が他力宗教に於ける「信行」の問題、亦幾多の高僧智識によりて熱心に眞摯に經驗上より教義上より論議研究せられぬ。「信行」を一具のものとしながらも印度の龍樹天親、支那の曇鸞等の諸高僧は救済の紐帶として重に「信」を唱道するを見よ、支那の慧遠導緯善導日本の空也源信源空等の諸僧は救済の紐帶として多く「行」を勸奨するを見よ、源空聖人の門より出て淨土宗を開ける聖光聖人其すゝむる所まさに「行」にあらずや、同聖人の門より出て眞宗を開ける親鸞聖人其すゝむる所まさに「信」にあらずや、嗚呼「信」をとらんか「行」をとらんか。

吾人は信す、救済は行にあらずして信にあり、殊に他力宗教にありては純一無二の信、これぞ誠に救済の唯一條件なることを、斷食苦行これに由て果して何れの妙境界に到達すべきか、五戒十戒これに依て果して何れの妙境界に到達すべきか、六度萬行これに依て果して何つれの妙境界に到達すべきか、修善の念強烈なれば強烈なる程湧き來る煩惱のおさへ難きを感じるは吾人の經驗にあらずや、徳を積みば積む程行をはげめばはげむほど、積功累徳の力微弱なるを感じるは、吾人の經驗にあらずや、波浪たゞならざる散動心を有しながら嫉妬憍慢卑屈等の煩惱を有しながら、如何にして解脱の妙境界に到達せんとするが、秋蝶の弱き修善力を以て、如何にして解脱の妙境界に到達せんとするか、これ豈具を以て海水を汲み盡さんとするに似たらずや、疾患の人徒歩世界を周行せんとするに似たらずや、ルーテルが寂寞たる寺院中衆に挺でたる苦行を修し乍ら、我罪障の多きに悩み救済の得難きに悶え昏迷



焦哀絶望の淵に沈みしは實に之がためにあらずや、親鸞上人が二十年  
 來修行の叡山に安んぜずして、夜々峻坂を降て六角堂の觀音に熱騰せ  
 しは實に之がためにあらずや、行に依て解脱の妙境界に至らんとする  
 こと、それ難いかな、されど信はこれ一念に絶待に冥合するなり、信は時  
 處位を簡はずして、直接に光明攝護の人たるなり、信は智と愚とを問は  
 ざるなり、信は男と女と老と少とを問はざるなり、信は富貴と貧賤と王  
 公と農夫漁民とを問はざるなり、信は如何なる處に於ても如何なる時  
 に於ても如何なる人をも一念に直接に救済の靈界に導くよ、壯夫百人  
 網を引て之を絶つ能はず、一童利劍一下忽ち兩斷するを見ずや、利劍は  
 是れ信なり、數十の力士力を推して門を開く能はず、弱夫一人手を伸し  
 て貫木を抜く、忽ち開て道を通するを見ずや、貫木は是れ信なり、然も「行  
 と信」とは必ずしも相隔離せるものにあらず、雨の降るや必ず天曇るな  
 り、されど天曇るや必ずしも雨ならず、信ある處必ず行あり、されど行あ

る所必ずしも信あらず、行に依て全く解脱に入らずとは云はず、されど  
 これ市の虎なり、甚だ稀なりとなすなり、盲龜の浮木に遇へるなり、これ  
 千歳の奇遇に過ぎざるなり、信に依て新生命を靈界に得るや、百即百生  
 千即千生なり、物を天上に擲てば必ず地上に落下するの確實なり、我親  
 鸞聖人の「信心爲本」を標榜して、救済を呼ぶもの豈宜ならずや。  
 我親鸞聖人は「行に就て二大新義を主張せるを見よ、一は自力宗教の  
 「行に對し、他力宗教の「行の意義を闡明せるなり、一は半自力半他力宗教  
 の「行に對し、純他力宗教の「行を闡明せるなり、菩薩修行の階段なるは十  
 二位の中、先づ十信を経過して十行の地位に進むは、佛教自力門の教に  
 あらずや、得證せんには教理行果の次第によらざるべからざるにあら  
 ずや、教に依りて理を知り、此處に信を起し行して果を得ると云ふもの  
 これ自力得證の次第ならずや、見よ自力教に在ては、必ず「信の次に「行來  
 るなり、然るに我が聖人は教行信證なる一段の新名目を樹立し、曰く吾



人得證の次第は、信行にあらずして行信なりと、我等は宗教的偉人の指導により、(教)慈悲の本なる智慧の本なる善徳の海なる大能の地なる救濟力(行)を直信直観す(信)、これに依て解脱の天地に到達すべし(證)と、嗚呼、行なるものは吾人の修すべきものにあらずして、獨り佛陀の有し給ふ所なり、行の靈能は現に十方に活動しつゝありて、吾人は之を信仰し、之に依憑すべきものたるなり、行ありて後心信あり、信ありて證ありと、これ豈に我聖人の自力迂路の信行に對する他力直入の行信と知らずや。

半自力半他力の宗教にありては、他方に歸入せんがためとて、或條件を要するなり、あるは念佛を稱へて渴仰の念を表明せんと云ひ、あるは諸善の裝飾によりて身のつくろいをなさんと云ふ、孝とは親の心を以て己が心となすものにあらずや、己が「まいらせ心」を以て親に致さんとす、これ果して眞の孝なるか、他力依憑は佛の慈悲に無條件を以て己を没入するものにあらずや、己が仕事を「てがら」として佛の慈悲に依頼

せんと云ふ、これ果して眞の他力依憑なるか、彼れ半自力半他力の教にあつては、他力の「信」に歸せんとて先づ自力の行をばげまんとす、豈に謬らすや、此場合にあつても「行」の次第なるも「行」を如來の「行」とせずして、自己の行とす、然も自己の「行」に依て如來の「信」を得んとす、豈に謬らすや、思ふに印度「ラーマ」の「ワタカライ」派の人は自己の意志に依て神の慈悲を捉住すること、兒猿の親猿に向ふと云ふにや、類せずや、我聖人は救濟の一大事は唯是れ「信心正因」なり、而して火ある處必ずや煙の付隨する如く、内に信火あれば外必ず行煙あらはるとなせり、眞實信心必具名號とはこのいはれにぞある、水到れば渠成る、信水流るゝ所何ぞ行渠なからん、此處に至ては「信」に依て「行」成ると云ふべし。

自力教に對して「行」「信」を主張せるを見よ、半自力半他力教に對して「信」「行」を主張せるを見よ、之を要するに「行」により我等の胸に信火燃え行煙あかれるなり、信火行煙皆なこれ如來の「大行」の然らしむる所なるを主



張せるなり。

「信」より來れる「行」とは何ぞや「行」とは行爲なり、讀誦觀察禮拜稱名供養これ「行」なり、說法教化これ「行」なり、農工商これ「行」なり、政治法律學術文藝これ「行」なり、社會事業慈善事業これ「行」なり、然り社會事業慈善事業これ「行」ならざるにあらず、政治法律學術文藝これ「行」ならざるにあらず、說法教化これ「行」ならざるにあらず、禮拜供養これ「行」ならざるにあらず、されど我親鸞聖人は云ひけらく。

大行と云ふは則ち無碍光如來の名を稱するなり、斯行即是れ諸の善法を攝し、諸の徳本を具し、極速圓滿眞如一實の功德寶海なり、故に大行と名くるなり、「教行信證」

「信」より流出する「大行」と云ふは、如來の「御名」を稱することこれなりと、見よ、小兒か悲しきとき母の名を呼ぶにあらずや、淋しきとき母の名を呼ぶにあらずや、喜しき時母の名を呼ぶにあらずや、嬉しき時母の名を呼ぶにあらずや、母の名を呼ぶは小兒彼自身の至情をあらはすものにして、小兒の「大行」は母の名に依てあらはる、我等世路の苦しき時、如來の御名を呼ぶ、煩惱に堪へ難き時、如來の御名を呼ぶ、感謝に堪へざる時、如來の御名を呼ぶ、歡喜あふるるとき、如來の御名を呼ぶ、如來の御名は我等の眞情なり、眞生命なり、我等の「大行」は如來の御名に依てあらはる、如來の御名を呼ぶとき、虚飾なきなり、眞實なり、清淨なり、如來の御名をよぶ、これ豈に偉大崇嚴な「大行」にあらずや。

す。「歎異鈔」

煩惱具足の凡夫火宅無常の世界はよろつのことみなもてそらことたわことまことあることなきに、唯念佛のみをまことにてをします。「歎異鈔」  
推して之を云ふ、我等御名の下に筆を執るとき、これ即如來の「大行」にあらずや、御名の下に政治を議す、政治これ如來の「大行」にあらずや、御名



の○下○に○鎌○をと○る○農○こ○れ○如○來○の○大○行○に○あ○ら○す○や○御○名○の○下○に○貧○民○を○撫○す○  
 る○慈○善○事○業○こ○れ○如○來○の○大○行○に○あ○ら○す○や○起○居○動○作○如○來○の○大○行○に○あ○ら○す○  
 や○語○黙○進○退○如○來○の○大○行○に○あ○ら○す○や○我○等○如○來○の○大○行○に○よ○り○て○如○來○の○信○  
 と○行○と○を○得○た○り○我○等○の○天○地○は○如○來○の○天○地○な○る○か○な○

### 第十三章 他力教の佛陀佛國

吾人は他力救済の別乾坤にあり、時代の潮波幾度か轉變するにかゝはらず、煩惱の風雲日日吹きすさむにかゝはらず、大慈光懷裡、平安を以て、歡喜を以て、感謝を以て、歩一歩日一日、光明無量の清淨世界に進向するもの、これ我等日常の生活的過程と知らずや。此處に我をして救済主の佛陀の何者たる、光明世界の何者たるやを縷述せしめよ。

救済主を何處に求むべきか、之を歴史上の大宗教家に求むべきか、然り歴史上に於ける大宗教家は、釋尊と云ひ基督と云ひ、龍樹と云ひ天親と云ひペテロと云ひポールと云ひ、其他の宗教的偉人なるもの、皆なこれ人生の煩悶苦痛の深淵に沈み、大死一番、僅に蘇生し來て始て解脱の天地に逍遙するを得るに至りし人なり、始て救済の光明に沐浴せし人なり、諺に云はずや、蛇の道を知るものは蛇と、救済主を知るものは救済



せられたる彼等にあらすして誰ぞや之を政治的偉人に問はんか之を  
 學者的偉人に問はんか之を科學的偉人に問はんか商工業的偉人に問  
 はんか之れ豈に舟を樵夫に問ふの類なるなからんかされと注意せよ  
 釋尊は何故に釋尊たりしか釋尊をして釋尊たらしめし或物あること  
 知れ基督は何故基督たりしか基督をして基督たらしめし或物あるこ  
 とを知れペテロポール何故ペテロポールしりしかペテロポールをし  
 てペテロポールたらしめしあるものあるを知れ龍樹天親は何故龍樹天  
 親たりしか龍樹天親をして龍樹天親たらしめし或物あるを知れ此釋  
 尊たらしめし或物基督たらしめし或物これこそまさしく眞の救濟主  
 にしてよし釋尊を認めたるも或物を認めざるものは未だ眞の救濟主  
 を認めざるものなりよし基督を認めたるも或物を認めざるものは未  
 だ眞の救濟主を認めざるものなり今代の人殊に進歩的思想の人士歴  
 史上の宗教的偉人の人格的感化をみとむるのみにして此或物を認め

能はずと云ふはそも何たる皮相淺薄のことぞや恰も人形劇の人形の  
 動作を認むと云ふとも之を動作せしむる或物を認めずと云ふに類せ  
 すやこれ唯だ眼に青黄赤白の色彩をみ耳に宮商角徵羽の音を聞くて  
 ふ如き五官の物質的經驗のみに依頼して心靈的經驗を度外視するの  
 結果此處に至りしものならずや思ふにこは樹下正覺八十八滅の應身  
 佛のみ獨り佛にして其の他に人間以上の佛を認めずと云ふ小乗佛教  
 の見解と同一ならずや吾人は歴史上の宗教的偉人の感化の大なるを  
 知る彼等は人心の冥暗を照す光明なり煩悶苦痛を慰むる慈悲なり彼  
 等の力は千歳に渡り幾億萬の人心を支配せりされど彼等は皆之を自  
 己の力なりと信せしや釋尊は佛の師は法なりと云ふにあらずや基督  
 は我父エホバと叫びしにあらずやこれ師なる父なる或物歴史的人物  
 以上に嚴として存在し玉ふことを宗教的經驗より證示したるものに  
 あらざるか嗚呼法然上人も應身佛なり親鸞聖人も應身佛なり傳教大



師も應身佛なり、弘法大師も應身佛なり、天台大師も應身佛なり、賢首大師も應身佛なり、釋迦牟尼佛も應身佛なり、大陽の光を受けて夜を照す月なり、地下の裂口を求めて噴出し旅人の口を醫する泉なり、我等は應身の光にたより暗黒なる此生活に迷はざることを得、應身の水により苦しき人世を安かにすることを得、されど光の本源は月にあらずして大陽にあり、水の源は泉にあらずして地下にあり、求め道の士、汝が尋ぬる救済主は、應身佛の指示に隨て、應身佛以上の天地に求めざるべからざることを知れ。

既に吾人は救済主は歴史上の宗教的偉人をして宗教的偉人たらしめしもの、即ち別に歴史以上に萬古儼として存在するものなることを主張せり。然らば其存在は如何なるものぞ、動すべからざる因果の法則は天をして天たらしめ、地をして地たらしめ、人をして人たらしめ、鳥獸をして鳥獸たらしめ、人の禍福も之により賢不肖もこれにより、美醜好

悪も一として之によらざるものなしと知らずや、されば疾病に苦むも死亡に遇ふも、必然の因果の然らしむる所なりと知れば、別に怨恨悲憤する所なかるべく如何なる薄命に際するも、逆意に沈むも、必然因果の然らしむる所なりと知れば、別に失望落膽する所なけん。慈悲も因果の然らしむる所、忍辱も因果の然らしむる所、持戒も因果の然らしむる所、純潔も因果の然らしむる所、殺生も因果の然らしむる所、偷盜も因果の然らしむる所、妄語も因果の然らしむる所、怠惰も因果の然らしむる所、かくて善のとるべきなく、惡の棄つべきなく、美の喜ぶべきなく、醜の厭ふべきなしと云ふに至らん。此の如き因果法果して我等の救済主なるか、殺生おもし、偷盜おもし、かくて世より人より厭はれ、嫌はれ、半獄に入りて苦しみ、かくて救済を得たりと稱するを得べきや、盲目なる因果法を以て第一義とするものは、謬れるかな。あるはシヨウベンハウエル

の如く盲目的意志を以て世界の根本原理となすものはあやまれるか



な、其他種々の器械的世界観は皆あやまれるかな、人或は云はん、大乘佛教に於ける實相无相の理、因果必然と相似て、然かも吾人に解脱を示す大法にあらざるなきかと。然り其形式やや似たり、されど其實大にことなるものあり、遮情門より云へば實相无相なり、若し表徳門より云へば實相有相なり、凡夫妄情の一切相は皆妄想なり、眞實知見より云へば、凡夫の妄想无と云はずして、何とか云はん、若し妄想を拂却し去らんか、一切相實相ならざるなし、一切相は如來の徳相にして、一切活動は如來の活動にあらざるなり、至る所に如來徳相如來活動を見るに至て、始て解脱の別乾坤に入れりと云ふを得べし、諸法實相无相の大乘の極理を以て盲目的世界観に比す、其差豈に雲泥の間隔のみならんや、或は人生の皈依を實在に托せんと主張するものあり、こは敢て不可ならず、されど實在を以て、平等无差別の絶待界にして、永く現象の世界と超絶せりとなせるもあり、あるは不可知のものとなせるあり、あるは一

種の活動とみなすもあり、實在を以て超絶的となすものも、不可知となすものも、一種の活動とみなすものも、到底人生の運命を托すべき救済者たらざるなり、かくて我等の救済主は盲目なる因果法にあらず、超絶的本體にあらず、不可知の本體にあらず、單なる活動的絶待にあらず、また佛教者の所謂无色无形の法身佛にあらざるなり。

吾人今救済の佛陀を歴史上の人物に求め能はざるを辨じたり、また冷酷なる純理に求め能はざるを述べたり、然らば如何なる所に佛陀を求めんか、吾人は内的經驗によりて、そが佛陀の如何にして何處に求むべきかを述べん、救済の主なる佛陀は無限の矜哀大悲を有せざれば一切群萌に同情を有する能はず、無限の智慧を有せざれば一切の境界を照鑑する能はず、無限の大能を有せざれば一切衆生の苦惱を救済する能はず、我が佛陀は無限の智慧慈悲大能を有し玉へる靈體なり、人は抑最後の要求として、何を求むるか、美衣、美食、かあらず、高樓、大厦、かあらず。



名譽權勢かあらず。學藝才能かあらず。然らば即ち何を求むるものぞ。至眞至美至善欠くるなき足らざるなき滅するなき損するなき完全圓滿の至善界ならずや。人の寸を得ば尺を望み尺を得ば丈を望んで止まざるは、何のためぞや。智あるものは更に智を望むで際限なきは何ぞや。財あるものは更に財を望んで際限なきは何ぞや。これ人性本然の要求なり。此本然の要求をかくるなく充足するもの、見よ完全圓滿の至善界にあらざれば不可能なることを。學者と無學者とを問はず。老者と幼者を問はず。男女と貴賤を論せず。富貴と貧賤を論せず。病者と健康者とを論せず。意識的にか無意識的にか、皆此至善界を望むこと。草木の枝葉常に日光の方面に向はんとする如きものあり。よしや殺人犯者の如き、偷盜犯者の如き、常道を逸したる人と雖、其深奥の中心に在てはまがりなりにせよ、皆此至善界を望んで止まざるものなり。嗚呼人性奥秘の要求としてこの至善界を望む、求めて得ず、勉めて到達せられず、求めて得ざれば益々煩悶に沈み、勉めて達せざれば愈々苦痛を加ふるに至る。恰も蜘蛛の巢を樹枝に營まんとするに、疾風屢々吹き來て之を破るに似たら

ば益々煩悶に沈み、勉めて達せざれば愈々苦痛を加ふるに至る。恰も蜘蛛の巢を樹枝に營まんとするに、疾風屢々吹き來て之を破るに似たらすや。要求を絶念し得ず。又満足し得ず。その苦痛豈に毒箭の胸を貫くの比のみならんや。嗚呼、此の大自然、宇宙、法界の大不思議よ。吾人人類に此の奥秘の要求を懐包せしめ乍ら之を到達せしめずとは何事ぞ。そも果して之を到達するの道なきか。敲けよ門は開かれん。求めよ物は與へられん。開かれざるは敲くことの切ならざるなり。與へられざるは求むることの切ならざるなり。然らば如何にして敲き如何にして求めんか。圓滿完全の至善界に到達せんには大海の一粟も唯ならざる微小なる自己の智慧にては何等の効をもなさざるを。知れ、淀に浮ぶ泡沫の如き自己の虚假不實の功德善根にては何等の効をもなさざるを。知れ、之に到達せむには無限の智慧慈悲大能を有するを要するを。知らずや。我等は智慧なし、慈悲なし、大能なし、されば我小なる智慧を棄てよ、小なる善根を



棄てよ、小なる力を棄てよ、赤々裸々己を虚して中心奥秘の要求をきけ、要求は既に得らるべきを自證するもの中心の奥秘絶待の靈光にふれたるを示すもの自己の計を棄てんか呼ぶものの中に呼ばるもの來り能求者即ち所求者となる始覺本覺も同一なりかくて眼をあけて汝の周圍を見よ、無限の智慧慈悲大能を有する无礙の大靈至る所に攝取の慈光を放つを見ずや、虚しき我は此无礙の大靈と一致融合するを見ずや、我等は一變せり、文學にも政治にも佛陀の靈光をみ、商估の牙籌にも農夫の鋤鋤にも佛陀の靈光をみ、火災に遇ふとき佛陀の無常の理を啓示するをみ、盜賊に遇ふとき佛陀の戒慎を啓示するをみ、酷寒肌を劈くときも炎熱體膚をこかすときも飢渴死亡を迫るときも皆此處に佛陀の慈悲の活動をみとむるに至る目に見る所耳にきく所法界宛然慈悲智慧大能の靈現たるを知る、我を救済する佛陀は我をして完全圓滿の至善境を憧憬せしむる力にして、我を攝取する法界に遍滿せる

智慧慈悲の力なり、此力は本覺にして始覺法にして機佛にして凡夫なり、此處に至て始て我を救済し玉ふ佛陀を見とめ得たりと云ふべし、佛説無量壽經に「示されたる因位に於ける法藏比丘果上に於ける阿彌陀如來は、此靈力の人格的化現なりと知らずや、法藏比丘の發願修行阿彌陀如來の光壽二無量、これ誠に感すべき力を聞くべき形貌となせり、經驗すべき靈を見るべき形貌となせり、見よ、歴史上の宗教的天才なるもの、皆法藏の迹を追ふて阿彌陀如來の地位に到達せんとするものにあらざるなきを、直接に光壽二無量智慧慈悲の靈に接觸し能はざるものは、先づ『佛説大無量壽經』にあらはれたる佛陀をみよ、衆生救済の報身佛温然えみを含みて此處にあらはれ玉ふをみん哉、我を救済し玉ふ佛はこれ此報身佛なる哉、歴史上の宗教的天才は、此報身佛の力の宿れるなり實在と云ひ眞如と云ふは此報身佛の活動的形式なることを、他力教に於ける我等を救済し玉ふ佛はまさに此智慧慈悲圓滿の報身佛にあ



佛陀の在しく玉ふ所佛國なり我等の生れんと願ふ所佛國なり然らば佛國は如何なるものぞ我等佛の慈光を仰き歡喜感謝に堪ざると  
 き恢廓廣蕩不可限極十方法界光明熾然たる淨土あらはる煩惱の波狂  
 ひ惡邪の妄念吹きすさむ時信心の白道を透して佛國は十萬億の彼岸  
 にあり佛國は近くして遠く遠くして近く邊にして無邊無邊にして邊  
 此趣味は無經驗に依て實證し得べきものなり佛國のトーマスモリア  
 の「ユートピア」の如くペラミーの理想國の如き凡ての人勞働を要すと  
 云ふにあらず平等の報酬を要すと云ふにあらず黄金より鐵は貴しと  
 云ふにあらず生産器關を國家の所有とせざるべからざるにあらず彼  
 國は所謂平等の國なり平等なりと雖主伴莊嚴を妨げざるなり水鳥に  
 法音をきゝ樹林に實相をきゝ見る所如來の德相ならざるなく聞く所  
 如來の德音にあらざるなし任運に自己の聖務をつとめ縁に隨て衆生

應化の大用を起して煩惱の林に遊んで救濟の事業を勉む彼國は美なり  
 善なり求めずして花開き鳥鳴く彼國には萬古長への法味樂あり福  
 德莊嚴自然に備る嗚呼彼國は平等なり清淨なり安穩なり美なり善なり  
 永遠にして朽ざるなり他力の信仰絶待依憑の安立唯一にして二も  
 なく三もなき故其所證其が安住の佛國また唯一にして二もなく三も  
 なしと知れこれ我らが求むる佛國なりされど若し自力の智解信仰を  
 用ひんか智解信仰人々各別なるが故そが感見の國土また千差萬別な  
 らざるを得ざるなり親戀聖人この我等が仰ぐ佛我等が欲生の淨土を  
 示すを見よ

佛は則ちこれ不可思議光如來土は亦これ無量光明土なり(顯淨土眞  
 佛土文類)

眞佛と言ふは「大經」に言く無邊光佛無礙光佛なり又言く諸佛中の王  
 なり光明中の極尊なり「論」に云く歸命盡十方無礙光如來なり(同上)



眞士と言ふは『大經』に云く究竟如虛空廣大無邊際なり(同上)  
 往生と言ふは『大經』に云く皆自然虛無の身無極の體を受けたり『論』に  
 云く如來淨華衆正覺の華より化生す又云く同一念佛別道なきが故  
 なり(同上)

#### 第十四章 他力教の現世生活の意義

佛。教。他。力。教。に。あ。り。て。は。そ。が。信。者。の。現。世。に。於。け。る。肉。體。及。び。思。想。行。動。  
 に。如。何。な。る。意。義。を。認。む。る。か。信。者。の。現。世。的。生。涯。に。如。何。な。る。地。位。を。與。ふ。  
 る。か。こ。れ。看。過。す。べ。か。ら。ざ。る。重。要。の。一。問。題。た。る。な。り。思。ふ。に。此。問。題。は。不。  
 可。思。議。な。る。人。生。の。秘。奧。を。ひ。ら。く。も。の。な。れ。ば。吾。人。に。と。つ。て。最。も。直。接。の。  
 關。係。あ。る。最。も。興。味。に。富。め。る。一。問。題。た。る。な。り。絶。待。他。力。を。唱。道。せ。し。親。鸞。  
 聖。人。は。此。問。題。に。對。し。て。は。幽。邃。な。る。思。索。を。根。底。と。せ。る。然。か。も。日。常。の。宗。  
 教。的。經。驗。に。よ。り。一。種。獨。特。の。見。解。を。下。し。て。千。古。の。疑。團。を。破。り。ぬ。

思ふに人生の如何なるものなるやに就ては東西古今の宗教家哲學  
 家之か解釋を下せしもの少なからず我が佛教のみにも其解釋區々  
 として一定せずと雖今佛教中樞要なる思想をあくれば左の三種とな  
 るなり。



(一) 人生に於ける家族及社會的關係を以て、煩惱の動作となし、多數の人類は、煩惱の自然の然らしむる所、必ずや是等の制約を要求するものなり、よしや一時種々の不幸災難により、この制約を脱却せんと欲するものも、忽ちまた之を要求するものなり、人類の家族的社會的要求は、其根底實として深く牢として固く、容易に動轉し亦滅却すべからざるものありて存するなり、是れ元來人類は煩惱業の結果として現出せしものなれば、人類それ自身既に厭ふべく、況んやそれより成れる家族又社會的關係固より厭惡すべきもの、眞正の賢聖は此眞理を看破し、絶ち難き父母妻子の恩愛を絶ち離れ難き國家社會を離れ、脱然として煩惱の係累を滅じ、獨り靜に空寂の理に住するなり、これ小佛教の根底にして、此思想は陰に陽に大乘佛教諸派にも通有せることは、掩ふべからざる事實なり、唯だ大乘佛教にありては、一層高遠の眞理より觀察して、家族社會等の煩惱、其物直にこれ菩提其物なれば、家族の一員として、家族の職務を

盡しながら、國家の一員として、國家の職務を盡し乍ら、社會の一員として、社會の職務を盡し乍ら、菩提の大道を徹見し安心の地位を得べしと教るものあり、或は人類は到底捨家棄欲の生活を送る能はざるものなれば、在家止住の身ながら、佛力他力に住持して安心を得へしと教るものあり、此の如き相違ありとは云へ、陰に陽に多少人生を煩惱視することは、佛教一般の通有性なりと云ふべし、今ま正しく小乗佛教の見解によらば、人類其物既に煩惱所感なれば、之を厭惡すべく、隨て家族的關係社會的關係も、煩惱の動作に過ぎざれば、之を厭惡すべく、家を棄て國を棄て欲を棄て、三衣一鉢、僅に身命を支へ、清瘞寂然空理に安住すべきものなり。

(二) 華天蜜禪の四家大乘の根本教義より、此人生なる者をなかめんが必ずしも剃髮染衣捨家棄欲人烟遠く絶したる深山幽谷に隱遁せざるべからざる理なし、一心清淨なれば、萬法清淨なり、若し一心清淨なれば、妻



子。を。有。す。る。も。清。淨。な。り。國。家。社。會。の。業。務。に。従。事。す。る。も。清。淨。な。り。農。工。商。に。身。を。委。ぬ。る。も。清。淨。な。り。一。心。汚。染。な。ら。ば。萬。法。汚。染。な。り。若。し。一。心。汚。染。な。ら。ん。か。深。山。幽。谷。に。遁。る。る。も。汚。染。な。り。樹。下。石。上。の。生。活。を。な。す。も。汚。染。な。り。剃。髮。染。衣。の。相。形。と。な。る。も。汚。染。な。り。煩。惱。菩。提。體。无。二。な。る。も。の。に。し。て。唯。だ。迷。悟。如。何。に。よ。り。苦。惱。の。種。子。と。も。な。れ。ば。安。樂。の。境。界。と。も。な。る。な。り。若。し。華。嚴。の。行。人。に。あ。り。て。は。煩。惱。を。起。さ。ず。一。切。の。境。界。を。以。て。一。即。一。切。重。々。无。盡。の。眞。理。を。み。る。よ。す。か。と。な。さ。ば。世。界。至。る。所。と。し。て。修。行。の。道。場。た。ら。ざ。る。な。く。何。を。行。ふ。と。し。て。菩。提。の。道。な。ら。ざ。る。な。け。ん。若。し。天。台。の。行。人。に。あ。り。て。は。一。色。一。香。无。非。中。道。の。旨。趣。を。悟。得。し。一。切。萬。法。一。切。萬。境。に。三。諦。圓。融。の。妙。致。を。觀。せ。ば。至。る。所。修。行。の。道。場。な。ら。ざ。る。な。く。行。ふ。所。菩。提。の。道。な。ら。ざ。る。な。け。ん。若。し。密。教。の。行。人。に。あ。り。て。は。至。る。所。行。ふ。所。に。即。事。而。眞。の。妙。理。を。認。め。聞。く。所。見。る。所。阿。字。本。不。生。の。意。義。を。み。と。め。ざ。る。を。得。ざ。ら。ん。や。若。し。禪。の。行。人。に。あ。り。て。は。喫。茶。喫。飯。是。佛。事。語。默。動。靜。是。本。來。

の。面。目。に。あ。ら。ざ。ら。ん。や。斯。の。如。く。大。乘。の。深。趣。よ。り。見。來。れ。ば。個。人。の。語。默。動。靜。の。上。に。も。家。族。の。上。に。も。國。家。社。會。の。上。に。も。そ。が。大。道。を。み。と。め。得。べ。き。も。の。に。し。て。必。ず。し。も。人。類。一。般。の。行。爲。を。煩。惱。と。し。て。排。斥。す。べ。き。に。あ。ら。ず。こ。れ。ら。の。境。界。に。住。し。こ。れ。ら。の。行。爲。を。な。し。つ。い。安。立。昌。平。の。天。地。を。樂。む。を。得。大。乘。の。教。義。の。斯。く。の。如。き。に。か。は。ら。ず。實。際。生。活。に。あ。り。て。は。高。僧。大。德。其。他。の。僧。侶。皆。是。れ。剃。髮。染。衣。捨。家。棄。欲。の。行。操。に。あ。ら。ざ。る。は。な。し。こ。れ。修。行。策。勵。の。障。碍。を。除。く。た。め。の。み。に。あ。ら。ず。印。度。小。乘。佛。教。の。狀。態。を。傳。承。せ。る。も。の。な。り。故。に。時。と。場。合。と。に。よ。り。羅。什。三。藏。の。妻。を。有。せ。る。が。如。き。一。休。禪。師。の。魚。肉。を。食。せ。る。が。如。き。あ。り。と。雖。此。の。如。き。人。に。し。て。此。事。あ。る。決。し。て。佛。教。の。教。理。に。背。逆。せ。り。と。云。ふ。べ。か。ら。ざ。る。な。り。果。し。て。斯。の。如。く。な。ら。ば。或。る。大。乘。佛。教。に。あ。り。て。は。肉。食。妻。帶。す。る。も。可。なり。せ。ざ。る。も。可。なり。農。工。商。の。業。務。に。従。事。す。る。も。可。なり。せ。ざ。る。も。可。なり。在。家。止。住。の。身。た。る。も。可。なり。出。家。隱。遁。す。る。も。可。なり。要。は。大。道。を。徹。見。し。て。昌。平。光。明。



の天地に住するにあるのみ

(三) 親鸞聖人の唱導せし絶待他力教より或人生なるものを観察すれば我人凡夫の作す三業の所作皆なこれ虚假不實のものにして假令善徳の行爲あるも恰も砂石の混せる飯の口に堪へざる如く、虚偽の善雜毒の善にして純善と云ふべきものなし。他語以て之を言へば、惡毒の雜りたる善なり、善行をなす下より惡心起りつゝあるも我等の現状ならずや、慈善の行爲をなすと云ひ乍らも、名譽若くは報酬を望むの情あるは我等の現状ならずや、親友の間にも嫉妬勝他の心を起すは我等の現状ならずや、嗚呼虚偽の善なる哉、雜毒の善なる哉、吾人日常の生活、家屬の關係、國家社會の關係、農工商に従事するも、學術文藝に従事するも、皆なこれ虚偽雜毒の善を根據として動作云爲するにあらざるなきなり、假令如何程此の虚偽を去れとす、いひるも、雜毒の善を脱せよとす、いひるも、慣既に性となれるものは決して脱却し能はざるなり、斯くて吾人は

此虚偽雜毒の善に立てる國家社會の關係を脱却し能はざるなり、果して然らば如何にせば可ならんか、赤々裸々ありのまゝの狀態を以て、佛智不思議の妙用に自己永遠の運命をまかせ、其上は佛陀の冥慮に恥ぢ罪惡を懺悔し、自然に佛陀の面影を個人の上に家庭の上に國家の上に社會の上に發露するに足るものは、是れ他力教徒の人生狀態と云ふべきものならずや。

宗教は純眞實にして一點の虚偽を容れず、浮草や今日は東明日は西と云ふ如き浮薄不定なることは、宗教に在て決して談するを許さず、吾人若し安心立命の地盤に立たんがため一の妄想、一の詐偽一の邪念一の惡行を許さずとすれば、是等の妄想邪念詐偽惡行及びその誘因となるものは、斷然拒絕せざるべからず、小乗の家族を厭離し、國家社會を遠離し、凡百の人生生活の事實を否定するは、實に此處に根原すと知らば、小乗の極端なる絶欲厭世主義、豈亦尊からずや、煩惱即菩提生死即涅槃



一度自性を觀し實相を證得すれば娑婆即淨土即身是佛人其まま佛資  
生産業皆佛道吾人生活状態の其まま佛界甚深の状態なり。

白隠禪師歌ふて曰く。

いはんや自ら回向して  
自性即ち無性にて  
因果一如の門ひらけ  
无相の相を相として  
無念の念を念として  
三昧無碍の空ひろく  
此時何をか求むべき  
當所即ち蓮華國

直に自性を證すれば  
すでに戲論を離れたり  
無二無三の道直し  
行も飯るも余所ならず  
謠も舞も法の聲  
四智圓明の月さえん  
寂滅現前する故に  
此身即ち佛なり。

(坐禪和讃)

大乘佛教の第一義諦豈また妙ならずや、小乗の斷欲主義痛快は即ち  
痛快なりと雖薄志弱行の吾人凡夫遂に之を實行し能はざるを如何せ

ん。大乘の實相現前主義、奥妙は即奥妙なりと雖吾人凡夫日夜苦樂の感  
に追はれ不斷取捨の情に惱まざるを如何せん、花は折りたし、梢は高し  
と云ふもの、吾人の心的現狀にあらざるや、此處に於てか他力主義あり、彼  
は斷欲枯木の沙門にあらず、大悟達觀の哲人にあらず、日夜苦樂の渦旋  
に出沒するものなり、二六時中取捨の情に惱まざるものなり、唯それ  
自己永遠の運命を以て、絶待不思議の妙用に一任し奉れば、苦しみ乍ら  
も大安あり、惱み乍らも大安あり、貪瞋煩惱の雲霧常に繁げしと雖感謝  
歡喜あり、大悲心の慈光不斷に心に湧き來るなり、彼は煩惱を斷せずし  
て涅槃を得たるなり、他語以て之を言へば何人も爲し得べく行ひ得べ  
き状態に於て、昌平光明の天地をみとむることを得たるなり、實相現前  
主義は即身成佛を談ずるものなり、何となれば喫茶喫飯是佛事、謠ふも  
舞ふも法の聲、一事一物佛事にあらざるなし、既に然らば自己の佛たる  
固より明白なり、現相實前主義の人は苦樂に追はれざる人なり、貪瞋愚



癡に苦しめられざる人なり、煩惱を見ざる人なり、罪惡なき人なり、これは到底吾人に望み得べきことにあらず、他力主義は即身成佛を談せずして、現生正定聚を談するものなり、相對界にあり乍ら絶待界をみとめたる人なり、有漏にあり乍ら無漏の光明に觸れたる人なり、罪惡に泣く下より、攝取の大慈を感謝せる人なり、彼は自己の不完全を知れり無能力を知れり、無智を知れり罪惡を知れり、不完全無能無智罪惡を知て完全大能大智大悲の光明に攝取せられ、歩一步彼岸に進みつつあるは他力信者の現世生活的意義なり、彼他力信者にありては、有漏の穢身はかはらねど心は淨土にすみあそぶのみならず、彼岸に望める大慈大智の光明は現世生活に反映し來り、家庭にあらはれて愛となり、社會にあらはれて良心となる。

我師親鸞聖人卓然として獨り現世正定聚の議を唱へぬ、吾人は現生にありて佛陀たるべき正定聚の菩薩位にあり、家にあり乍ら國にあり

乍ら農工に従事し乍ら學術文藝にいそしみ乍ら佛陀の光明に慰められつゝ護られつゝ清められつゝ導かれつゝ歩一步彼岸の無量光明土に進むもの、これ他力信者現世生活の意義なりと知らずや。



## 第十五章 他力教の發展

宗教として純他力教は、發展の頂上に立ちて精神安立の極致を示すものなり、後聖それ起ると雖更に一毫の之に加ふるものあることなげん。されど見よ、大船巨舶を浮ぶる洋々たる大河も、其源に溯れば僅に觴を濫ぶるの一微水に過ぎず、是等幾多の小流相會し相合し、瀬にはやみ岩石に激し、遂に涵天の大河となりしなり、更に深く本源にいたりて之を究めんに、濫觴の微水も涵天の大河も、皆これ雨水の地上に下り其流れの離合集散の状態之をしてかく然らしむる所なり。今日化を十方に及ぼしつゝある大乘微妙の他力教も、小乗教諸論部に在ては、あるかなきかさへ疑はれたる程深き底に潜んで其形貌をあらはさず、馬鳴の『起信論』や堅慧の『法界无差別論』や、其他大乘の諸論部にありては、濫觴の一支流としてあらはれ、龍樹天親、曇鸞、導、善導、源信、源空諸師に至ては、大艦

巨舶を浮べぬる洋々たる他力の港灣となれり。されど更に一步を進めて深く之を討尋すれば、淨土三部經にあらはれたる法雨地上に降り、時處縁の關係に應じて此の如き發展消長の迹を示せし者たるや疑を容れず、吾人は師親鸞の教へたる純他力の絶頂に立ちて、過ぎにし他力教發展の迹を一瞥して、其光景の偉大にして大なる意義を有せるをみとめ、我如來の慈悲善巧の至大至深なるを感謝するものなり。

淨土の三部經彼の詮顯する所のものは、果して何ぞや、彼は淨土他力教の最本源なり、淨土他力教の發展を見んと欲するもの、先づ之に依て其由て來る所を知らざるべからざるなり、『佛說大无量壽經』二部の肝腑とする所は、『他力眞實の法』を明すにあり、衆生は如何にして救濟せらるゝか、修善によりてか、あらず、冥想によりてか、あらず、自己の无能无力を自覺して至心信樂如來大願力に乗托するにぞある。如來とは何ぞ、如來は如何にして出で來り現在如何に存するか、信仰とは何ぞ、信仰は如



何にして得べき得たる状態は如何なるべき之を説明して餘蘊なきものは『佛說大无量壽經』の所詮とする所なり『佛說觀无量壽經』の決歸する所は機の眞實を明すにあり如來の大願に歸すべき機類は如何なる人なるか嗚呼彼は智者たるを要せず徳者たるを要せず三毒具足の凡夫其人これ他力教所歸の眞實の機なり摩訶陀國頻婆娑王羅の夫人韋提希は惡人正機を標して『佛說觀无量壽經』の主人公となれり『佛說阿彌陀經』は機法二種の眞實を明すを以て其要とせり法は他力の一法なり機は末代の惡機なり今日末代の惡機を救濟するもの他力一法を拵て他に途なきなり『佛說阿彌陀經』の所詮此處にあり亦此淨土三經なるものは一具の法門にして離すべからざるものありて存んす而して種々の方面より異様に觀察するを得べし若し其極致の方面より一様に觀察すれば三經共に絶待他力の大道を明せるなりされど表面上の觀察によれば『佛說大无量壽經』は絶待他力を明し『佛說阿彌陀經』は半自力半他

力を明し『佛說觀无量壽經』は自力を明せしものとみるを得べけん自力一轉して半自力半他力に至り半自力半他力一轉して絶待他力に至るこれ信仰の過程なり宗教の門に入りし人の何人も踐まざるべからざる道路なりよしや宗教的天才と云はれ超越種性の人と雖其經過の迅速なるのみにして此三段は心すや經過せざるべからざるなり然らば即ち三經具足して信仰の全體を明すと云ふべきかこれ三經に對する師親鸞の觀察にしてまた我等の信仰の經過に一致するものなり

淨土の七祖その純他力の安心に至ては所證平等にして一毫の軒輊を見ずと雖教義發揮の一段に至ては時代境遇の要求の然らしむる所なり自己の性質より從來勉めたりし學問の關係より各々特殊の發揮なきにあらざるなり印度の聖者龍樹は紛々たる各種の佛教を實行難易より判斷を下し『易行品』に於て難行道易行道の二大剖判をなし孱弱怯劣の一切衆生は他力易行道によりて救はるべきことをすすめき天



親は他方信仰の本末を明白にし、『浄土論』に於て「一心五念の因に依て五功德の果を得べきこと」を示されぬ支那の曇鸞は『浄土論』の微意を發揮し、往還二回皆他力なるを詳細に論述し、純他力の教義をして理路明白、疑惑の其間に容るる余地なからしめき、導綽に至ては、時代の變遷より眞摯なる論議を進め、佛教を分て、聖道浄土の二門となし、末法濁亂の今時にありては、唯た浄土の一門のみ我等の通入すべき道なるを勸めぬ。善導はこれ嚴肅熱烈の人、古今の聖道諸師の浄土他力に關する謬れる解義を匡し、定善二善の要門を棄てて、弘願の一道に歸すべきを説き、他力の教義は師に依て勢熾轉た高きを致せり。日本の源信は『專雜得失』報化二土を詳細は辨別して純粹なる信仰を鼓吹しぬ。源空は日本佛教各宗以外に浄土宗を開き、盛に撰擇本願の念佛によりて凡夫救済の成立をとき、浄土の一門衆目具瞻の府たるに至りしなり。

師親鸞は七祖の精粹を得て眞宗の教行信證をときのべ、絶待他力の

極粹を發揮してそが究意を極む。地方の絶頂信仰の極致、宗教史上不朽の光彩なり。我は信んず、絶待他力の信仰これ信仰の極致にして、幾十の宗教その決歸する所之に外ならず、我等は師親鸞の靈導によりて此絶大の信仰の門に入るを喜ぶものなり。絶待他力の信仰、无終永遠の末かけて一毫の増益損減なしと唯そが教義そが説明に至ては、七祖各種の發揮ありしが如く、師親鸞の已證ありしが如く、世の進歩と共に進み、人の發展と共に發展すべきものたるを疑はざるなり。



第十六章 他力教の地位及使命

「ひろくこれをいはば法華の諸法實相眞言の阿字本不生華嚴の三界唯心涅槃の悉有佛性般若の盡淨虛融禪宗の都莫思量法相の五重唯識三論の八不中道みな彌陀佛智の一法の異名なるべし」決智鈔然り吾人は確に之を認む絶待の大道は唯一にして二もなく三もなければなり

『法華』に諸法實相と云ふ實相はこれ如來なり如來を認め如來に安住するこれ他力にあらすや『華嚴』に三界唯心と云ふ眞心これ如來なり如來を認め如來に安住するこれ他力にあらすや楚元禪師元のため斬られんとして歌ふて云ふ乾坤孤筇をたつるに地なし喜び得たり人空また空珍重す大元三尺劍電光影裏春風を斬る」と見よ乾坤の大猶ほ且つ孤筇たもたつる地なきを見よ人空法空一物の存立することなきを獨り儼として存するものは唯如來あるのみ三尺の劍を動して一切皆空

の春風を斬る痕なく傷なし如來によれるものは劍もきる能はず火もやく能はず我を以て祖元禪師をみる彼は如來によれる人なる哉三論の祖伽那提婆敵のため腹をえぐられ流血淋漓彼云く諸法の實を悟らば受くる者もなければ亦害するものもなし誰か親誰か賊誰か害汝等癡毒の欺く所となる何ぞ妄に大號叫するものぞと如來は諸法の實なり如來を害するものなければまた害を受くるなし伽那提婆は如來によれる人なる哉我は慥に信す天台華嚴法相三論禪みなこれ如來他力の妙用を認めて其功德を讚美するものなることを豈唯だ佛教各派のみならんや基督教マホメト教儒教神教多神教一神教汎神教其他一切の諸宗教皆如來他力の妙境界に向て進向しつゝあるものなるを知る

「佛法世間法に異らす世間法佛法に異ならず佛法世間法雜亂あることなし亦差別なし『華嚴經』と世に倫理道德ありこれ如來他力の妙用なり智識分別ありこれ如來他力の妙用なり農工商これ如來他力の妙



用なり。家庭國家社會これ如來他力の妙用なり。如來によらざる人は倫理に苦しまん。智識に苦しまん。家庭に苦しまん。國家に苦しまん。如來に依らざる人は不幸なるかな。如來に依れる人は、農に樂あり。商に樂あり。家に歡喜あり。國に歡喜あり。一切に慈光あり。如來に依れる人は幸福なる哉。農商につとむる人も來れ。病人も來れ。健康者も來れ。婦人も來れ。男子も來れ。皆來て如來の德を讚美せよ。一切の世間法の上に佛法をみとむるを得るを知らずや。

宗教の本質は他力なるか自力なるか。人或は云ふ。宗教は完全なる自力發展にありと。或は云ふ。絶待他力の信憑なりと。他力の信憑是にして自力發展非なるか。自力發展是にして他力の信憑非なるか。蓋微の美醜を論せんと欲せば、先づ蓋微を見せしめよ。蓋微を見て美と云ふ人をして美と云はしめよ。醜と云ふ人をして醜と云はしめよ。美醜の評にかゝはらず。蓋微は蓋微なり。自力他力を論議する前に當つて、先づ宗教の本質

を見よ。之れを自力と云はんとする人は、自力と云へ。之れを他力と云はんとする人は、他力と云へ。宗教の本質に至りては、一毫の異變だもなきなり。我は云ふ。宗教の本質は如來をみとめて、之に安住するにあり。小我を没して、大我に入るにあり。我云ふ所の他力とは如來にあり。大我にあり。如來に入りて、初て宗教あり。大我に入りて、始て宗教あり。故に我宗教は他力宗教なり。我親鸞聖人は、阿彌陀如來と叫びたり。墨鸞大師は、盡十方無碍光如來と叫びたり。釋尊は之を「法」と云ひ。基督は之を「神」と云ひ。孔子は之を「天」と云ひ。ソクラテスは之を「デーモン」と云ひ。スピノザは之を「絶待」と呼びたり。き思ふに、これ皆宇宙の大靈と感じたり。遍一切の慈悲と感じたり。智慧と感じたり。大力と感じたり。故に吾人は自力宗教と呼ばずして、他力宗教と呼ぶの至切至適なるを感ずるものなり。されど自力發展の意義、また此處に外ならずとせば、それは唯其人の呼ぶにまかせんのみ。



宗教の本質は、單に個人的安心を得るに止まるか、或は社會成立の要素として必要なるか、我他力宗教に在ては、此二者を包括して餘さざるものなり。個人の安心を得せしむる點より云へば、個人的と云ふべく、されど社會成立の根本精神として存在し、社會を靈化し、社會に意義を與ふる點より云へば、社會的なりと云ふべきなり。鋤とる農夫は如來の命によりて鋤とるものなり、鬪書にいそしむ讀書子は如來の命によりて書をよむものなり、廟堂に議する政治家は如來の命によりて經世を策するものなり、勞働に従ふ工夫は如來の命によりて勞働するものなり、かくて如來によりて讀み書き語り働き議し、家のこと國のこと、まさに如來のことにあらずや。他力宗教は個人に大安心を與ふるものなり。社會成立の大精神となりて存在するものなり。これ他力宗教者にありて不可疑の事實にあらずや。

我他力宗教には祈禱なし、働くべきは如來之を命じ玉ひ、受くべきは玉ふことをなすのみ、如來に感謝するあるのみ。

我他力教の儀式は極めて單純なり、灌頂を要せず、加持を要せず、受戒を要せず、必ずしも盛壯の香華燈明を要せず、唯だ佛恩の大なるを感じては、時處諸縁を嫌はず、大慈父の御名を稱するにあるのみ。

我は我「他力宗教論」の一系列の教義のため筆をとること、此處に十數回初に宗教の精髓は「絶待依憑」にあるを論述し、次に入信の大道は「聞即信」にして活ける信仰なる祖師の言を信するにあるを述べたりき。されど轉入の道程としては「常識」よりも「倫理」よりも「智力」よりも「感情」よりも、定散二善いづれの方面よりも、他力大道に歸入することを得べしと説き、これより進んで「他力信仰の成立」を説き、佛陀及佛國を説き、信行を説き、「本願」を説き、「名號」を説き來て、此處に光榮ある讀者諸兄の厚意を感謝して本論の結末を告げんと欲す。



思ふに我他力宗教は一代佛教の精髓なり過去二千幾百年佛教開展の心府なり一切諸宗教の根軸なり過去に於て幾百萬の人心を支配し現在に於て萬民仰慕の光明となり將來の幾億萬の民心の指導者たらんとす他力教は偉大なるかなまさしく我如來の御名に依て他力救済の道を示せしもの印度に釋迦牟尼世尊あり龍樹天親の二菩薩あり支那に曇鸞導綽善導の三師あり日本に源信源空の二上人あり若しそれ廣く之を云はんか馬鳴堅慧の二大士の如き淨影天臺の如き賢首慈恩の如き行基の如き傳教の如き弘法の如き是等の英僧傑士皆如來の徳を讚嘆し之に皈入するにあらざるなきなり我祖親鸞上人は三國七祖及び三年年來の英僧善智識の信仰を承け今日の我等に他力の光大明を與ひ玉ふ我等之に依て五濁煩惱のさかまく中に於て清淨の大信心を得たり憂悲苦惱の胸に歡喜平安を得たり有漏の穢身かはらねど心は淨土にあり何の幸福之に加ふるあらんや何の歡喜か之にまさるあ

らんや我は親鸞聖人の指導に依て無上の他力救済に遇ひしを感謝したてまつる。

佛慧功德をほめしめて十方の有縁にきかしめん信心すでにえんひとよつねに佛恩報すべし暗夜に燈光を得ば途行く人に其光を分たばや夏の野に泉を見れば來る友に之を知らさばや我等親鸞聖人の指導に依て他力救済の光明を見たり嗚呼途行く諸卿よ來て此處に光明を得よ野を辿る同胞よ來て此處に清泉に浴せよ。



下  
編



情眠をいましむるの冬老若共に無言にて此好時節を空過するを嘆息  
 せられし如上の言我等豈に餘所事として聞き流すを得んや今や野も  
 山も秋はふけ静寂の氣天地に漲ぎれり況んや霜月二十八日は心靈界  
 の大導師絶待他力の唱導者我親慈聖人淨樂界に還り玉ひし時なるを  
 や我等此好時に當り聖人在世の昔を追想し法樂を味ふもの豈に閑事  
 なりと云ふべけんや。

請ふ吾人をして先づ鎌倉時代の宗教的自覺の狀態を明にし親鸞上

### 第一章 鎌倉時代及親鸞聖人

春夏の間は人の心も萬づにまぎれて情もおさまらざる程に秋冬は夜もながく  
 時分もよければ法義をも感嘆し佛法の物語不密なんどのあらん人々におひて  
 は一はしいひきかせ又たづねんことをもたへんとおもう志のあるによりて  
 この座敷に一縁に居住すと雖更に老若ともに無言のみにてさてはつる体なれ  
 ば堪忍せしめたるその所詮一もなし云々。(帖外御文)

Fixing your mind and understanding  
 on me, you will come to me, there is no  
 doubt. He who thinks of the supreme  
 divine Being, O son of Pritha, 1 with  
 a mind net (running) to other (objects),  
 and possessed of abstraction in the shape  
 of continuous meditation (about the su-  
 preme), goes to him. (Bhagavadgita,  
 Chap. VIII.)



人の地位を論ずるに當り、行論の便宜上、鎌倉時代以前の佛教の大勢を論せしめよ。鎌倉朝以前の佛教とは即ち欽明天皇十三年より後鳥羽天皇に至る迄の佛教也。吾人思ふに此間の佛教の特徴と云ふべきものに三あり。

- (1) 政教一致の傾向。
- (2) 攘災求福の現世祈禱。
- (3) 佛教の學問。

見よ日本のコンスタンチン帝とも云ふべき阿育王とも云ふべき佛教大外護者聖德太子は、佛教を以て國民の心を和らげ國家の秩序を定めんとせり。十七憲法の第二條に云く「篤く三寶を敬へ、これ四生の終歸萬國の極宗なり、若し三寶によらずんば何を以てか枉れるを直ふせんと云ふ、これ明に佛教を以て民心を統治せんとするものならずや。」

孝德天皇大化の新政も又政教相關なり。天皇の佛法興隆の敕命に云

く「欽明の朝、佛教始めて我國に來りてより、蘇我稻目先づ之を受け、敏達以後推古の朝に至る迄、馬子獨り其法を顯揚して、餘臣信受せず。此の典の將に亡びんとするを支へたり。朕今更に又將に正教を崇び、大猷を光啓せん」と。これ豈政教相助の制度にあらずして何ぞや。孝謙天皇の時に至り、政教一致其極に達し、余弊の甚しき云ふに堪へざる者あるに至れり。平安朝に入りて、傳教弘法二大師の出世ありと雖、彼等猶ほ鎮護岡國家を表榜し、朝廷の之に對するや、國家の力を以て之を保護せり。其他代々皆政教相關の狀態ならざるなし。而して此六百餘年間、佛教者のなす所は、概して之を言へば、奈良の六宗、平安の二宗、皆佛教の學問的研究と禱禱修法現世利益の事にあらざるなきなり。殊に弘法大師出世以來、加持祈禱の風一世を風靡し、其弊また少なからず。而して平安朝の末、佛教漸く衰ふるや、僧侶は徒らに法衣の紫緋を爭ひ、坐位の上下を競ひ、祈禱功驗の有無を事とし、真正に菩提心を起し、道を修するものは、



寥々曉天の星も管ならざるの状態なりしなり、其甚しきに至ては身僧侶にあり乍ら圓顛に鉢巻をなし袈裟をたすきとなし、兵器を提げ、暴行を恣にする者あるに至りぬ。嗚呼佛教此ままにして進行せんか、前途知るべきのみ、唯た一の滅亡あるのみ。

人一生涯中翻然として自己の何者たる自己の何をなさざるべからざるかを自覺し、從來の醉生夢死の態度を改め、發奮興起することがあるが如く、社會もまた社會的自覺なるものあり、我鎌倉あの如きはまさに稱して宗教的自覺時代と云ふべし、そも鎌倉の時代に於て此の如く宗教的精神鬱然勃興し、高僧知識雲の如く輩出し、心靈界の一新紀元を造出したるもの、其原因種々ありと雖、之を二個の原因に概括することを得べきなり。

(二)藤原道長に依て歌はれし此の世をば、我世とぞ思ふ、望月の飲けたることのなしと思へばと云ふ藤原家榮華の夢もいつしか凋落の秋と

さびれぬ、藤原家は衰へて世は武門武士の時代とはなりぬ、見よ平家は奔馬の勢を以て興れり、清盛の赫々たる權威は落日をも呼び返すべく云はれたり、されど見よ、一度蛭ヶ島の流人頼朝の崛起するや、爛熳たる櫻花も一夜の嵐にくだけて、花の如き平家の一門またたく間に檀浦の水泡に化し去り、世は源氏の白旗の下にあつまりき、而して其源氏は一族相争ひ兄弟相疑ひ、義仲は殺され、義経は遠く逃避し去り、世は紛々擾々として遂に實權は陪臣北條氏の所に歸するに至りぬ、此の間世相轉變、人生の深く頼むべからざるは、明々瞭々人心に印象せられたり、今日時めきし人も明日亡び、主を失ひし臣、臣を失ひし主、夫に分れし妻子、子を失ひし親、親を失ひし子、臂をとりてかたらひし親侶も、戰場に臨みては敵味方嗚呼世は何たる悲惨のことぞや、世は決して頼むべからざるなり、此處に於てか社會の民心は靡然として安立の宗教を求むるに至れり、宗教に非らずんば、以て民心を満足せしものなきなり、此の必然の



形勢は鎌倉時代をして宗教的自覺の域に到達せしめたるなり。

(二)平安朝の末佛教の腐敗その甚しきに至りては、破戒无慚の徒多く其の上と稱するものも徒らに加持祈禱の効驗を争ひ、僧位上下を競ひ法衣の紫緋を誇るに過ぎず、甚しきに至ては身僧侶に乍ら兵器を持し亂暴を事とするものあるに至る。物窮すれば通ず、此に於てか真正に菩提心を起し佛道を憂ふるもの、一方にあらはれ來り古來未だ嘗て見ざる所の清新活潑なる宗教的氣運を開くに至りしなり。之に加ふるに當時日本光明の母國たる支那にありては、宋の命運いたく衰え元まさに興らんとして、彼國もまた紛擾の渦旋中において、彼國の高僧にしては一は難をさけ一は法を傳へんがため我國に渡來せるもの少なからず。道隆、一筆、子雲、圓覺、道隱、潭園等の如き皆なこれなり。されば内興外來の爲法傳道の精神一時に煥發し、此處に燦然たる鎌倉時代の宗教的自覺に到達したるなり。

此の如く戦亂に惱まされたる民心の安立を願ふ衷心の要求は、新興の摯誠なる宗教家の活動と相合し、此に古來嘗て見ざる所の偉烈なる宗教的時代を現出するに至りぬ。見よ、南都北京の各宗にも少なからざる大徳智識の輩出せるを、法相の貞慶、良遍に於ける、華嚴の明惠、圓照に於ける、律の俊傍、淨業に於ける、三論の永觀、眞言の覺鑊等皆なこれ一代の先覺者として世を導びくの大光明たりき。又見よ、飄然世間を脱出して悠悠々諷咏を事とせる隱逸の高士のあらはれたるを、何處より人は入りけん、眞葛原、秋風吹きし、道よりぞこしと歌ひし長明あり、願くは花のもとにて、我れ死なん、其望月のささらぎの頃と述懐せし西行あり、色好まさらん男は玉のさかづきの底なき心地すと云ひたる兼好あり、これ皆紛亂の浮世以下に樂天の境界を求めたる人なりき。されと思へ、春の野は千紫萬紅いづれも皆うるはしと雖、春を代表するは梅にあらずや、櫻にあらずや、鎌倉時代の是等の高德隱士皆なこれ一代の偉觀なりと雖、



鎌倉時代の宗教的自覺を代表する人物としては未だし然らばその代表的人物とは誰ぞ曰く法然曰く榮西曰く親鸞曰く道元曰く日蓮この五上人は誠に宗教自覺時代の代表として現出し學問智辯の外に唯一の信仰と唯一の悟道を以て千載を照すの偉人なりとす吾人は今此處に五上人の性行功績を叙せざるべし唯たそれ五上人の地位態度は如何殊に親鸞聖人の此時代に於ける地位態度の如何なるものなるかを論究せんと欲す。

吾人の見る所を以てすれば榮西道元二禪師の禪宗は當時の武士を代表せる武士的宗教なり。膽氣銳利泰然不動直に生死の難關を透破するは禪の本領にしてまた武士に適合せる恰好の教義なりとす。榮西道元同く禪と稱すと雖其態度に至ては二者大に同じからざるものありて存せり。榮西は北條時頼の知遇を受けて建仁寺に住し『興禪護國論』をあらはして禪の護國の効を説きたる如き彼は要路の人に結び國家の

上より教を布かんとせるなり。道元は純世間的の人にして世間の地位名聞を惡むこと毒蛇のそれにも似たり。北條氏の召請を斥け人烟稀疎容易に人の至らざる越前の深山に隠れ一個半個の真正の求道者を得るを以て満足せり。弟子玄明北條氏より二千石の寄附を受けて歸りしを怒り雷に彼れを破門せるのみならず彼の居室の床下の土三寸を掘りて棄てしめたり。後嵯峨上皇彼の徳を聞き紫衣及び禪師號を賜ふ再三辭すれども聞かず已を得ずして之を受け一偈を賦す曰く永平雖谷淺救命重重被却猿鶴笑紫衣一老翁と終世紫衣を着せすと云ふ。二者此の如く其態度ことなりと雖武士的宗教を代表せる點に至ては一なり。此の榮西道元の武士的宗教に對すれば法然親鸞日蓮の宗教は平民的宗教を代表せるものと云ふべし。淨土宗と云ひ眞宗と云ひ日蓮宗と云ひ固より智者學者高位貴紳武士の其教に入るを喜ぶと雖本來の其特色とすべきは農工商一般の愚癡無智の凡夫を救濟するを以て其能



事とするなり此三宗は儘に平氏を代表せる平民的宗教と云ふべきなり而して此の平民的宗教の中法然と親鸞二上人の態度を比較すればまた大にことなるものあり法然上人は身淨土門創立の人にして對聖道門の地位に處するものなり彼の宗義は在家其儘にして妨げずと雖彼は持戒堅固の清僧の風に隨へりき彼は愚癡無智の凡夫を正所被とし乍ら三帝の戒師となりき各宗の碩德願眞淨嚴明遷證眞公胤の如きを歸依せしめき藤原兼實同經宗同兼雅平重盛等の貴紳を隨喜せしめき彼の性質は春風の薫する如く寛廣にして能く人を容れにき親鸞上人は法然上人の弟子なりと雖其行動に至りては著しき差別あり親鸞上人は對聖道門のそれにあらずして他力門の醇乎として醇なるものなりき彼は世の指嘲を顧みずして肉食妻帶せり彼は善人猶ほ往生す如何に況んや惡人おやと絶叫せり彼は直截なり簡明なりまた左顧右観せず言はんと欲する所のものを云ひなさんと欲する所のものをな

せり彼は多くは關東北國の阪村にありて世の高僧知識と稱する人のすて願みざりし下層の人民を教化するを以て己が任務となせり之に依て之を云へば法然親鸞二師共に淨土他力の平民的宗教代表者なりと雖法然上人は對聖道門的にして親鸞上人は赤々裸々の純他力の人なりしなり又日蓮上人と親鸞上人を對照せんか日蓮上人は平民的宗教なるにかいはらず彼は大に國家の力によらんとせり『災難退治鈔』『守護國家論』『立正安國論』皆なこれ國家の力により日蓮の宗義を廣めんとせる動機より出でたるものなり彼は『法華經』を信んせざるが故種々の災難恐るべき外寇起るものなれば國家の義務として『法華經』を信し之等の災難を一掃せざるべからずとなせり彼念佛無間禪無魔眞言亡國律國賊の四個格言を唱へて諸宗を痛罵せり念佛眞言の徒ただに淺近の教に僻して妙法の大道を妨ぐ彼れ無間國賊の徒たる所以なりとされば日蓮上人の行動は國家的折伏的なりしなり親鸞上人は之に



對して一人なりとも半人なりとも其人の士農工商たるを問はず有縁の衆生に他方救済の大道を宣傳するを以て満足せり彼れは國家の力によらんとはせざりき要路の貴紳の資助を得んとはせざりき一言にして之をつくせば日蓮上人の國家的なるに反して親鸞上人は個人的なりしなりまた親鸞上人は日蓮上人の折伏的なるに反對して絶對他力の大道の下に諸宗を該攝せしめたり彼れ他力大道の外二乘三乘あることなしと宣言せり日蓮上人を以て暴風の吹きすさむに比せば親鸞上人は大海の百川を呑納するにも比すべけんかし斯の如く鎌倉宗教自覺時代の五代表者の態度を考察し來れば我親鸞上人の地位我親鸞上人の特色掌紋をみる如くそれ明なりこれを要するに我親鸞人は平民的宗教の代表者なり他方救済者の醇乎として醇なるものなり國家は頼主義にあらずして絶待他方に融合する主義なり飾りなき宗教の本義直義にあらずして絶待他方に融合する主義なり飾りなき宗教の本義直

日本は光榮なるか  
 截なる信仰の極致は彼によりて日本に顯彰せられたり上人を生める



## 第二章 法然親鸞二師の比較

親鸞聖人『歎異鈔』の一節に於て、自己の信仰確立は師法然の信仰を其まゝ傳へたるものにして、更に一毫の増減だもなきを述べて曰く、  
 親鸞におきては、たい念佛して彌陀にたすけられまいらすべしと、よ  
 き人のおほせをかうむりて、信する外に別の子細なきなり念佛はま  
 とに淨土にむまるたねにてやはんべらん、また地獄におつる業に  
 てやはんべらん、總してもて存知せざるなり、たとひ法然上人にす  
 かされまいらせて念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべか  
 らずといふ。

此の文の中よきひとのおほせをかうむりてとは師法然上人の指導  
 を云ふ者なり、親鸞聖人は全心をあげて法然上人の指導に信順し、死生  
 迷悟之に一任して毫末の疑感を容れず、之れ誠に不可言の宗教の妙味

にあらずや、見よ、宗教は人法不二にして人と真理と二あるにあらず、人  
 即ち真理なり、語を換へて之を説明せんか、悟證せる真理は直に其人に  
 顯現し、其人の外に別に真理あるにあらざるなり、されど世の學術なる  
 ものは全然之と相違せり、有名なる希臘の大哲學者アリストートル云  
 く、  
 師「プラトール」は敬愛すべきも、真理はより一層敬愛すべきなり。

アリストートルはプラトールに事へると二十年、そが朝夕の教を親く  
 受け、深厚の情誼決して輕しと云ふべからず、されどアリストートルは  
 云はずや師は尊敬せざるべからざるも、真理はより一層尊敬すべきな  
 りと、彼れは此くの如くにして師プラトールの學説を改めたりき、嗚呼人  
 と真理は劃然として二なり、若し二ありとすれば二のもの時に背反す  
 るなきを得ず、アリストートルの師プラトールの學説に背くまた止むを  
 得ざるなり、これ宗教と學術の相違點にして大に味ふべき所なりとす。



既に述べたる如く親鸞上人は法然上人を信してよし地獄に墮落することをも辭せざるものなり、然らば二師の性行相同しきやと云ふに決して然らず。法然上人は寛廣の高徳、和氣霽々春風の薫する所接する人をして己を忘れしむ。自ら愚癡の法然坊と謙遜すと雖、桃梨の下自ら蹊をなす如く智慧第一の法然房の名は都下に警鐘の響をなし、朝廷の公卿紳士に於ける武士に於ける、各宗の高僧碩學に於ける各種の學者に於ける、皆靡然として之か教化を受け隨喜渴仰して止まざりしなり。而して亦上人は常に罪惡深重の凡夫と稱へしと雖、持律嚴正、肉を食はず妻を有せず、日常の行規は清僧の風なりしなり、彼の簡明直截時機相應の他力の教法を彼の崇高なる人格と相待つて、またくまに南都北嶺の勢力を壓して民心に響き渡れり。親鸞上人は法然上人の親密なる弟子なりしと雖、そが性行に於ては著しくことなれる所のものあり。始め親鸞聖人は師の座下に教を受けしとき、晩年暫く花の都の平安にあ

りし時を除けば、其他は悉く關東北國の草深き田舎を巡回し、鋤鋤をとる農民、藻鹽たく海人を對機として、一日も倦むとなく諄々として他力易行の福音を傳へられたり、斯の如く彼は當時高僧知識と稱せられし人の棄て、顧みざりし下層の人民を教化するを以て唯一の目的とせり。故に平安に在ては彼の名は喧傳せざりき、當時の碩學鴻儒は彼の有無意に介する所にあらざりき、彼は深谷を照らし日光なりしなり、而して其氣象は實に凜として犯すべからざる者ありしなり、衆人の指嘲を顧みず在家似同の宗風を守りて斷然として肉食妻帯をなせり、純他力の教義を餘蘊なく發揮して聖道諸師の怒を避けざりしなり、譬へば冬嶺に聳いる孤松にも比すべきか。故に親鸞上人は其在世中はあまり世間に知られずして止みきと雖、其下層の人民に及ぼせる冥々の感化に至ては、深其大なるものありしなり、さればこそ六百年の今日他力の教義は諸宗を冠絶するの大勢力となりしにはあらざるや。



櫻の麗梅の潔共に賞すべし牡丹の豊富秋蘭の淡清何れも愛すべき  
 なり法然上人の温厚にして圓滿なる博學廣覽にして鴻學碩儒を恐れ  
 しめたる身に戒律を持ちし容儀を慎み三帝の戒師となり貴紳高德を他  
 力門に引入せめたる如きと親鸞聖人の俊抜にして銳利なる所信を斷  
 行して少しの跣踏なく一身を捧げて下民の教化に従事せる如きと其  
 性行同しからざるものありと雖共に饒益有情の使命を果せる大人物  
 にあらずや是れ一は天性にもよるべしと雖また境遇地位の然らしむ  
 る所ならずんばあらざるなり法然親鸞二上人をして地位を換へしめ  
 ば法然の親鸞たる親鸞の法然たるやも知る能はざるなり夫れ然り而  
 して吾人は思ふ同く秋霜に打たるゝと雖或樹は黄となり或樹は赤と  
 なりて持有の色彩を現す同一他力救済に沐浴せるものと雖其性質に  
 より其境遇にとり温厚なるもの勇敢なるもの多才なるもの朴直なる  
 ものありて決して同一なる能はずされど皆同く佛光攝取中の人なれ

ば各其性質に應じ境遇に適すたる行動をなし法界を莊嚴すべきもの  
 たらすんばあらざるなり



第三章 親鸞聖人と使徒保羅

一

佛教淨土門中之を印度にしては馬鳴龍樹世親の如き稀世の博達廣  
辭の人あり支那にしては惠遠曇鸞道綽善導慈愍の如き超凡清高の人  
あり日本にしては原信空也良忍法然の如き卓犖華實の人ありこれら  
の高僧大徳は皆他方宗教の深遠なる源泉に溯り盡十方无碍光佛の大  
慈悲光明に接觸し自信教人信の實を具へられたるは一點の疑惑をも  
容るべき餘地なしされど吾人によりて晴夜仰て餘星よりも尙且つ輝  
然たる金星の眼を射るが如く感ぜられ地圖を開て幾多の高山峻嶺の  
雲を凌ぎ蒼穹を摩する中特にヒマラヤ山の聳然として先づ眼につく  
が如くに思はるゝは日本親鸞聖人の絶待他方の信仰なり聖人の他方  
信仰は聖道門教義の一隅に寄生したるものにあらず別時意趣てふ方

便的なるものにあらず名は他方なりと雖も聖道門の教理や儀式を用  
るが如き鶴的のものにもあらずして他に云ふべき言葉なく唯だそれ  
絶待他方なり釋迦佛一代の八萬四千の教義は他方の門戸なり天臺の  
一心三觀一念三千も華嚴の一切重々无盡の法門も眞言の即事而  
眞も禪の眞指人心見性成佛も他力的不思議の部分的説明に過ぎず救  
濟の大事實解脱の大問題に對して戒律座禪觀念剃髮染衣讀經禮拜善  
も悪も要せざるなり唯だそれ絶待他方なり見るも他方聞くも他方語  
るも他方行ふも他方家も他方國も他方社會も他方朋友の友情親子の  
愛主従の義長幼の序皆これ他方なり唯だそれ絶對他方なり此妙味は  
アサナク報佛ノ功德ヲモチナカラオキユフナク彌陀ノ佛智ト  
モニソス人にとりて誠に明白にあらずやされば佛教他方宗教の精髓  
を見んと欲せば聖人の絶待他方を伺ふべきなり聖人の著書として存  
するもの左の十一部なり



教行信證七卷、淨土文類聚鈔一卷、愚禿抄一卷、入出二門偈一卷、淨土和贊一卷、高僧和贊一卷、正像末和一贊、三經往生文類一卷、尊號真像銘文二卷、一念多念證文一卷、唯信鈔文意一卷、

外に聖人の御言葉または御消息を集めたるもの數部あり。

末燈鈔一卷、親鸞聖人御消息集一卷、嘆異抄一卷、口傳鈔三卷。

基督教は佛教に比敵すべき一大宗教なり、猶太教の神は正義の神なりしが、基督に至て正義の神一轉して愛の神となりしなり、達教者を石撃して殺せよと命したる神は我儕の罪の爲に其子を遣して挽回の祭物とするを辭せざる神となりき、律法を以て義としたる神は信仰を以て義とするに至りき、之を要するに他力的宗教となりしなり、基督一度メシアとしあらはれ、十二の使徒を撰び七十人の傳道者をおき、ユダヤサマリヤガリラヤに道を傳へしめしや、清新の氣衰宇に降り、信火の燃ゆる所四方に傳播し、一時は見よ世は皆彼に従へりと云ふに至れり、さ

れど、ハツサイ、サドカイ其他當時の官吏の嫌惡は、遂に十字架上の大迫害となれり、牧者を失ふたる羊は、勝手さまゝに散亂して迷路に彷徨する如く、基督を失ふたる夥多の群弟子は、風を臨んで皆八方に散亂して終れり、其使徒と稱せられたる人と雖、息を呑み聲を潜め、僅に自己の信仰を維持するに過ぎざりき、此處に突如として使徒等に不拔の勇氣を授けて傳道に従事せしめたるは、基督の復活なり、基督復活の一事は荒涼たる沙漠を變じて滿目鬱蒼たる綠野となし、基督教の宣傳は日に月に高く廣く響き來れり、中にステパノなるもの、諸所の會堂に入りて大に神の福音を説き、人民の之に敬服するもの、草の風に靡くが如し、反對者は神を冒瀆するものとして之を石撃し殺せり、保羅は即ち此時手を下したる一人なり、保羅は基督教信者を迫害せんがため、旅行し始めシリヤの原野を横ぎりダマスコに近きしとき、天に大なる光ありて彼を照し、また耶蘇の聲を聞けり、是より彼の精神は一回轉せざるを得ざりき、



タマスコに入るや、唯に基督教徒を迫害せざるのみならず、アキニヤの導の下却て熱心摯實なる基督信者となるに至れり。保羅は剛膽不屈の人にして、一度意を決して進むときは、峻嶺大嶽も亦眼中に容れざる人なり。彼は耶蘇教徒を迫害せしよりもより一層猛烈の勢を以て新傳道に従事せり。律法儀式に依りて苦しみし彼は、今や唯一の信仰に依れる神の救済を認めたり。律法儀式に依て苦めざる愛の神を認めたり。使徒中最も深き他力を認めたり。保羅は基督教中に於ける他力中の他力愛中の愛を認めたる人なり。『新約全書』の半は實に保羅の書翰なりとす。

達羅馬人書十六章。達哥林多人前書十六章。達哥林多人後書十三章。達加拉太人書第六章。達以弗所人書第六章。達腓立比人書四章。達哥羅西人書四章。達帖撒羅尼迦人前書五章。達帖撒羅尼迦人後書三章。達提摩太前書第六章。達提摩太後書四章。達提多書三章。達腓利門書一章。達希伯來人書十三章。

外に保羅の事を記載したるもの『使徒行傳』あり。

親鸞聖人の絶待他力の信仰は、佛教他力の粹中の粹、醇中の醇なるものなり。使徒保羅の他力信仰は、耶蘇教他力の粹中の粹、醇中の醇なるものなり。此二者の信仰の趣味を比較するときは、二者の間符節を合したるが如き共通の趣味あると同時に、踰越し能はざる差異點あり。吾人にとりて津々として盡さぬ興味存す、乞ふ少く述べしめよ。

## 二

自己は清淨にし、一罪惡なしして、ふ實相觀に安住し得る人は、大慈悲者の救済を要せざるなり。されど、こは善惡以上の濶天地に到着し、任運无功用に帝の則にたがはざる人にあらざるよりは、實際かゝる安心成し能はざるなり。屢々虚言を吐き乍ら何ぞ罪惡なしと思はれんや、瞋恚の火炎を燃し乍ら嫉妬の刃をとき乍ら其他山なす煩惱を胸に懷き乍ら果して罪惡なしと云ふか。地動説は如何に眞理なりとも、吾人の眼には



天動説は眞理なり、動すべからざる事實なり、妄法无體は如何に眞理なりとも、實相无相は如何に實義なりとも、吾人には罪惡の存在は事實なり、經驗なり、抜くべからざる實感にあらざるや、親鸞聖人は罪惡に對して如何なる宗教的經驗を有し王ひしぞ。

善人なをもて往生をとくい、はんや惡人をやしかるを世の人つねにいはく、惡人なを往生すいかにいはんや、善人をやと、この條一旦そのいわれあるに、たれとも、本願他力の意趣にそむけり、そのゆへは自力作善のもととは、ひとへに他力をたのむ心缺けたるあひた、彌陀本願にあらずし、かれども、自力のころをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、眞實報土の往生をとくるなり、煩惱具足のわれらはいつれの行にても、生死をはなることあるべからざるを、あはれみたまひて、願をおこしたまう、本意惡人成佛のためならば、他力をたのみたてまつる惡人もとも、往生の正因なり、よて善人たにこそ、往生すれ、ま

して惡人はとおほせさふらひき(嘆異鈔)

かゝるあさましき三毒具足の惡機として、われと出離にみちたゑたる機を、攝取したまはんための五却思惟の本願なるが故、たゝあふきて佛智を信受するにしかず、しかるに善機の念佛するを、決定往生とおもひ、惡人の念佛するを、往生不定とうたかう、本願の規模、こゝに失し、自身の惡機たることをしらするになる。(口傳鈔)

煩惱具足と信知して、本願力に乗すればすなはち穢身すてはて、法性常樂證せしむ。(高僧和讀)

吾人は罪惡の凡夫なり、三毒具足の惡機なり、罪惡は吾人の自性なり、罪惡を捨てんと欲するも、棄る能はざる吾人なれば、そのまゝながらの佛の本願に、乗托してこそ、初めて、此處に安心の一道を得べけれ、使徒保羅は罪惡に對して如何なる宗教的經驗を有せしぞ、

明達者なく神を求る者なし、皆曲て邪となれり、善を作るものなし、一



人もあるなし、その喉は破れし、瑩その舌は欺詐をなし、其唇には蝮の毒をもてり、其口は詛と苦とにて満、その足は血を流さん、がために疾し、殘害と苦難は其途に遺れり、彼等は平康なる道を知らず、その目前に神を畏その懼あることなし、それ律法の言ところは其下にある者の示すと我輩は知る。こは各人の口塞り、又世の人、こぞりて神の前に罪ある者と定らん、爲なり、是故に律法の行に由て神の前に義と爲らるゝもの一人だにあることなし、蓋し律法に由て罪は知らるゝなり、(羅馬書三ノ十一—二十)

然らば誇ところ安くに在りや有ることなし、何の法を以て無とするか、行の法か非す信仰の法なり、故に我おもふに人の義とせらるゝは信仰に由て律法の行に由らず、(羅馬書三ノ二七—二八)

キリストイエス罪人を救んために世にきたれり、信すべく亦疑はずして納べき話なり、罪人のうち我は首なり、(提摩太前書一ノ十五)

律法道德なるものは、唯に我身の无罪を證明せざるのみならず、我身に安心を與へざるのみか、却て我身の罪惡を證據たつるものなり、我身に苦悶を與ふるものなり、腐敗したる死狗は、假令四大海水を以て如何に之を洗滌するも、其腐敗を滅却し去る能はず、律法の下制裁の下、腹も立ち慾も起り、執着も憎惡も起るにあらずや、惡人のうち我は首なり」と云ふ感は、放恣の人の言ふ言葉にあらずして、最も嚴肅なる眞摯なる人の云ふ言葉なり、親鸞聖人は叡山にありて、二十年間苦修練行せし人に、あらずや、保羅は多年最も嚴肅に律法儀式を守りし人にあらずや、此人にして律法道德は我を救濟せずして、有罪を證明するのみと云ふ、救濟唯一の大道は、唯だそれ信仰が二人の致を一にするもの、豈に深く味ふべきにあらずや。

## 三

吾人は底下薄地の凡夫なり、障重き罪人なり、持戒作善に依て苦界を



解脱し能はざるものなり、觀念思惟に依て大悟徹底し能はざるものなり、然らば如何にして現世の苦惱を脱却し、金剛不易の安心を得能ふか。力なき稚兒は慈母の手にすがりより他なし、盲目者は目ある人の指導に従ふより他なし、煩惱多き人は大量ある人の寛恕を仰ぐより他なきなり、煩惱多き盲目なる無力なる吾人は、慈悲深遠ニシテ虚空ノ如ク智慧圓滿ニシテ巨海ノ如キ、佛陀の救済を仰ぐより他なし、救済の條件として他に六ヶ敷ものあるにあらず、自身ハ現ニ是レ罪惡生死ノ凡夫曠却ヨリ已來、常ニ没シ常ニ流轉シテ、出離ノ縁アルコトナシ」と自己を零位に下し、大慈大能の佛陀の救済を信じて一點の疑なきにあり、此時に當てや、自己は全然零位無價値にあれば些々たる智識を頼むべき必要なく、有耶無耶なる道德を信賴するの要なきなり、唯だ無疑無慮乘彼願力てふ一點に歸す、救済に對しては善も智も不必要なるは、親鸞聖人も保羅も同一なり、されど此の他力的救済てふ中に、佛教と基督教の中に

顯著なる相違あるを看過すべからず、佛教は吾人の苦むも樂むも因果の法則の然らしむる所にして、佛陀の吾人を苦ましめ、又樂しむるにあらず、佛陀も因果の法則に隨て佛陀となりしものにして、因果の法則を破ぶること能はざるものなり、佛陀が吾人を救済し玉ふと云ふも因果の法則に隨て救済し玉ふなり、因果の法則は佛菩薩の作りしものにあらずして、本來本有のものなり、然るに基督教に在ては、神は苦樂賞罰の源泉にして、神の意志の外に因果の法則なし、故に基督教の救済は、神自己が罰すべきものを自己が許すまでなり、されば佛教他力救済の救済中には、因果と佛と衆生との三法の關係を認めざるべからず、然るに基督教に在ては、神と人類を認むるに過ぎざるなり。

然り而して信仰に依て救はれたる人の状態如何と云ふに、此點に就ては、親鸞聖人の他力信者と、保羅の他力信者はまた大なる差異あり、親鸞聖人の教へられたる他力信仰は、泥中に咲ける蓮華なり、蛤に含まれ



たる眞珠なり、美しき蓮華咲きたりとして穢れたる泥滅するものにあらず、貴き眞珠を含めばとて其蛤光を放つものにあらざるなり。汚泥は依然汚泥なり、蛤は依然蛤なり。善導大師の所謂衆生貪瞋煩惱中能生清淨願往生心なり、他方信仰を得たればとて、昨日まで無學文盲なりしもの今日より大智大識となるものにあらず、昨日まで貪慾を起し瞋恚を起し愚痴をこぼしたるもの、今日より腹も立ず、欲も起らぬと云ふものにあらざるなり。假令他方信仰を得たりと云ふも、人間としては貪慾も起り瞋恚も起り愚痴も出でん、人間は依然人間なり、人間なりと雖他方信仰を得たる人は、大船に乗托せる人、安心立命を得たる人、救済を得たる人なり、親鸞聖人の「不斷煩惱得涅槃」とは即ち是なり。然らば他方信者は獲信以前と獲信以律と、其行爲に於て少しも相違する所なきやと云ふに、決して然らざるなり。救済し玉ふ佛陀は、智慧の極慈悲の極なり、佛心やどりて我胸にいまさば佛心と凡心と一になり玉は、雲霧假今日光

を蔽ふと雖晝と夜との相違あるが如く、佛陀のおもかげは、不知くの間に信者の行爲に現る。然ればこそ親鸞聖人は、念佛行者十種の利益の中に「觸光柔軟」の利益ありと云ひ、「轉惡成善」の益ありと仰せられたり。猶ほまた見よ、

なによりも聖教のをしへをもらす、また淨土宗のまことのそこをもしらすして、不可思議の放逸無慚のもの、ものなかに悪はおもふさまにふるまふべしとおほせられ候なるこそ、かへすくあるべくも候はず。北の郡にありし善乗房といひしもの、につゐにあひむつるゝことなくてやみにしをばみざるけるにや、善乗坊人と爲り放蕩不仁不孝正法に背く、聖人之を遠け、遂に親睦せざりしを云ふ、凡夫なればとてなにごともおもふさまならば、ぬすみをもし人をもころしなんとすべきかは、もとぬすみこゝろあらん人も、極樂をねがふ念佛をまふすほどのことになりなば、もとひかうたるこゝろをも、おもひな



をしてあるべきに、そのしるしもなからん人に、悪くるしからずといふことゆめくあるべからず候。煩惱にくるはされておもはざるはかたにすまじきふるまひいふまじきことをいひおもうまじきことをおもふにこそあれ、さはらぬとなればとて、ひとのためにもはらわろくすまじきことをもしいふまじきことをいはい煩惱にくるされたる儀にはあらで、わさとすまじきことをせば、返々あまるじきことなり、鹿島なめかたの人々の、あしからんとをいひとめ、その邊の人々のことにひかみたることをば、制したまはりこそ、この邊より出来るしるしにては候はめ、ふるまひはなにともしるにまかせよといひつると候らん、あらまじきことに候、この世のわろきもすてあさましきこともせさらんこそ、世をいとひ念佛まふすことに候へ、としころ念佛する人なんと、人のためにあしきことをしまたいひもせんは、世をいとふしるしもなし、されば善導の御をしへに

は、悪をこのむ人をはついでとをさかれとこそ、至誠心のなかに、はをしへをかせおはしまして候へ、いつかはわかこゝろのわろきにまかせてふるまへとは候、おほかたは經釋をも知らず、如来の御ことをもしらぬ身には、ゆめくその沙汰あるべくも候はずあなかしこ

十一月廿四日

親鸞(末燈鈔)

まつをのく、昔しは彌陀のちかひしらす、阿彌陀佛をもまふさすを、はしまし候しか、釋迦彌陀の御方便にもよほされて、いま彌陀のちかひをもき、はじめてをはします身に候なり、もとは無明の酒にえひて、貪欲瞋恚愚癡の三毒をのみこのみめしあふて候つるに、佛のちかひをき、はじめしより、無明の酔も、やうくすこしつゝ、さめ、三毒をもすこしつゝ、このますして、阿彌陀佛のくすりを、つねにこのみめす身となりて、をはしましあふて候そかし、しかるになを、忍ひもさめ



やらぬにかさねて酔をすゝめ毒もきめやらぬになを三毒をすゝめ  
 られ候らんこそあさましく候へ煩惱具足の身なればとてこゝろに  
 まかせてみにもすまじきことをもゆるしくちにもいふまじきこと  
 をもゆるし心にもをもまじきことをもゆるしていかにもこゝろの  
 ままにてあるべしとまふしあふて候らんこそ返々不便にをばえ候  
 へゆひもさめぬさきになほ酒をすゝめ毒もきえやらぬにいよく  
 毒をすゝめんがごとしくすりあり毒をこのめと候らんことはある  
 べくもさふらはすところをばえ候佛の御名をもき念佛を申して  
 ひさしくなりてをばしまさん人々はこの世のあしきことをばいと  
 ひすてんとをばしめずしるしも候へしところをばへ候へはじて佛  
 のちかえをきゝはしむる人々の我身のわろく心のわろきををもひ  
 しりてこの身のやうにてはなんぞ往生せんするといふ人にこそ煩  
 惱具足したる身なればわかこころの善惡をばさたせずむかへたま

うぞとは申候へかくきゝてのち佛を信せんことをもふこゝろふかく  
 なりぬるにはまことにこの身をもいとひ流轉せんことをもかなし  
 みてふかくちかひを信じ阿彌陀佛をもこのみまうしなんとする人  
 はもともこゝろのまゝにて惡事をもふるまひなとせんじとをほし  
 めしあはせたまはばこそ世をいとふしるにても候はめ云々(末燈鈔)  
 これらの教示によらば獲信以後の行動は生死の大問題に關して心  
 を動さぬと云ふのみにあらず四苦八苦の爲に憂悶せざるのみにあ  
 らず自然に罪惡の凡夫の中に佛の面影のあらはれくることは疑ふべ  
 ざらざる事實なりされど有漏の穢身を有したる人間なり煩惱を有した  
 る人間なり純善無漏の聖者と云ふにあらず至聖至靈の境界は現在世  
 界に於て到達する能はず未來世界にて始めて到達すべきなり而して保  
 羅の他力信仰を得たる人は罪より救はれたる人なり少しも惡のなき  
 人なり愛の人なり謙孫の人なり勇氣の人なり溫和の人なり信仰に依